

九州南部における
古墳時代鉄器の基礎的研究



橋本達也 編

鹿児島大学総合研究博物館

2014.08

九州南部における
古墳時代鉄器の基礎的研究

橋本達也 編

鹿児島大学総合研究博物館

2014.08

例言

1. 本書は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究Cを受けて実施した研究の成果報告書である。

課題名：九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究

課題番号：22520770

研究代表者：橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館 准教授）

交付期間・予算：2010年度 直接経費 900 千円 間接経費 210 千円

2011年度 直接経費 700 千円 間接経費 270 千円

2012年度 直接経費 800 千円 間接経費 240 千円

2013年度 直接経費 900 千円 間接経費 270 千円

2. 本書の作成にあたっては、橋本達也が企画・編集・執筆し、三好裕太郎（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）が協力・執筆した。また、吉本美咲（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程）が一部編集を補助した。

本書はとくに記名のない限りは橋本執筆である。

また、下記の諸氏が主に本研究を補助した。

青木 弘（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

仲辻慧大・上地 舞・三好裕太郎・ライアン ジョセフ（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

木村 理（大阪大学文学部学生）

（所属は研究参加時）

3. 本研究で対象とした資料：所蔵機関：協力者は下記のとおりである。記して謝意を表したい。

北後田地下式横穴墓群：肝付町教育委員会：新福深（当時）・松山幹生、中村耕治（公財 鹿児島文化振興財団埋蔵文化財調査センター）

島内地下式横穴墓群・内小野遺跡：えびの市教育委員会：中野和浩

小木原1号地下式横穴墓・六野原8号地下式横穴墓・六野原10号地下式横穴墓

：宮崎県立西都原考古博物館：甲斐貴充（当時）

下北方5号地下式横穴墓：宮崎市教育委員会：西嶋剛広

溝下出土・島内1号地下式横穴墓：東京国立博物館：古谷毅（敬称略）

4. 北後田地下式横穴墓群の調査成果については中村耕治氏の助言を得た。また、調査状況の写真の利用にあたっては、肝付町教育委員会の了解・鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得た。

北後田地下式横穴墓群出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター 吉岡康弘・辻明啓両氏（当時、現・（公財）鹿児島文化振興財団埋蔵文化財調査センター）のご協力を得た。

なお、北後田地下式横穴墓群調査状況写真・出土遺物を除く、本書掲載写真は橋本の撮影によるものである。

5. 本研究で手がけた資料調査には、本書に収載しなかったものがある。今後とも同様の調査成果の公表は継続して進めたい。

目次

I	九州南部における古墳時代鉄器	
1.	古墳時代鉄器研究と九州南部	1
2.	型式学的特質	2
(1)	時期的推移	2
(2)	器種構成	3
3.	九州南部における鉄器生産	8
4.	九州南部における古墳時代鉄器の展開	9
II	九州南部の主要古墳時代鉄器関連研究文献一覧	11
III	肝属郡肝付町北後田地下式横穴墓群とその評価	
1.	北後田地下式横穴墓群出土資料の紹介にあたって	15
2.	再録「北後田古墳群」『高山郷土誌』	15
3.	北後田1号地下式横穴墓出土の遺物	20
4.	北後田1号地下式横穴墓出土鉄器の製作技術と年代	28
5.	岡崎18号墳1号地下式横穴墓と北後田1号地下式横穴墓出土遺物の比較	31
IV	えびの市島内地下式横穴墓群の鉄器とその評価	
1.	島内地下式横穴墓群の鉄器とその評価	32
2.	島内地下式横穴墓群の被葬者と副葬品との関係	40
V	九州南部古墳時代の甲冑資料	
1.	島内地下式横穴墓の甲冑	45
2.	島内3号地下式横穴墓出土 三角板鋌留短甲	49
3.	島内21号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留短甲	52
4.	島内62号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留短甲	54
5.	島内76号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留短甲	56
6.	島内81号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留短甲	58
7.	島内21号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留衝角付冑	60
8.	島内76号地下式横穴墓出土 三角板革綴衝角付冑	62
9.	島内115号地下式横穴墓出土 小札鋌留衝角付冑	64
10.	小木原1号地下式横穴墓出土 横矧板小札鋌留衝角付冑	66
11.	下北方5号地下式横穴墓出土 甲冑・武器・装身具	69
12.	六野原8号地下式横穴墓出土 小札鋌留眉庇付冑	76
13.	六野原10号地下式横穴墓出土 小札鋌留眉庇付冑	78
14.	出水市溝下出土 横矧板鋌留短甲	80
VI	結語—九州南部における古墳時代鉄器の特質とその意義—	83

挿図目次

I	
図 1	九州南部の各地域と主要古墳墓1
図 2	九州南部の古墳墓の編年2
図 3	九州南部の圭頭鏃の編年 (えびの盆地を中心に)3
図 4	九州南部の二段腸袂鏃4
図 5	九州南部の刀剣類4
図 6	九州南部の中期甲冑分布5
図 7	九州南部の馬具分布6
図 8	九州南部の胡籜7
図 9	九州南部における鉄鏃の各種様式7
図 10	えびの市内小野遺跡の出土遺物8
図 11	九州南部の弥生終末～古墳前期の鉄器9
III	
図 12	北後田 1 号地下式横穴墓16
図 13	北後田 2 号地下式横穴墓17
図 14	北後田 1 号地下式横穴墓調査状況18
図 15	北後田 1 号・2 号地下式横穴墓調査状況19
図 16	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄剣20
図 17	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄装具20
図 18	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄剣 柄間巻紐21
図 19	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄鏃付着 矢羽根21
図 20	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄鏃22
図 21	北後田 1 号地下式横穴墓出土 U 字形鉄鋤先23
図 22	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄剣23
図 23	北後田 1 号地下式横穴墓出土鐮子状鉄製品24
図 24	北後田 1 号地下式横穴墓出土鐮子状鉄製品 展開図24
図 25	北後田 1 号地下式横穴墓出土鐮子状鉄製品 細部 繊維24
図 26	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄器 (1)25
図 27	北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄器 (2)・ 北後田地下式横穴墓群出土人骨 (1)26
図 28	北後田地下式横穴墓群出土人骨 (2)27
図 29	中村光司による U 字形鉄鋤先の製作技法28
図 30	U 字形鉄鋤先の製作工程30
IV	
図 31	島内 21 号地下式横穴墓と出土甲冑33
図 32	島内地下式横穴墓群の甲冑出土土墓 (えびの市 2010 に加筆)33
図 33	島内 114 号地下式横穴墓出土龍文銀象嵌大刀34
図 34	女性に伴う鉄鏃 (39 号)35
図 35	圭頭鏃 (左) と長頸鏃 (右) (21 号)35
図 36	鹿角装の各種副葬品36
図 37	蛇行剣と鉄鏃37
図 38	甲冑37
図 39	馬具38
V	
図 40	えびのを中心にみた九州南部の甲冑型式の 位置45
図 41	島内 3 号地下式横穴墓出土短甲49
図 42	島内 3 号地下式横穴墓出土短甲 細部 (1)50
図 43	島内 3 号地下式横穴墓出土短甲 細部 (2)51
図 44	島内 21 号地下式横穴墓出土短甲52
図 45	島内 3 号地下式横穴墓出土短甲 細部53
図 46	島内 62 号地下式横穴墓出土短甲54

図 47	島内 62 号地下式横穴墓出土短甲 細部55
図 48	島内 76 号地下式横穴墓出土短甲56
図 49	島内 76 号地下式横穴墓出土短甲 細部57
図 50	島内 81 号地下式横穴墓出土短甲58
図 51	島内 81 号地下式横穴墓出土短甲 細部59
図 52	島内 21 号地下式横穴墓出土衝角付冑60
図 53	島内 21 号地下式横穴墓出土衝角付冑 細部61
図 54	島内 76 号地下式横穴墓出土衝角付冑62
図 55	島内 76 号地下式横穴墓出土衝角付冑 細部63
図 56	島内 115 号地下式横穴墓出土衝角付冑64
図 57	島内 115 号地下式横穴墓出土衝角付冑 細部65
図 58	小木原 1 号地下式横穴墓出土衝角付冑 (1)66
図 59	小木原 1 号地下式横穴墓出土衝角付冑 (2)67
図 60	小木原 1 号地下式横穴墓出土衝角付冑 (3)68
図 61	下北方 5 号地下式横穴墓 主体部構造69
図 62	下北方 5 号地下式横穴墓出土眉庇付冑 (1)70
図 63	下北方 5 号地下式横穴墓出土眉庇付冑 (2)71
図 64	下北方 5 号地下式横穴墓三角板鋌留短甲72
図 65	下北方 5 号地下式横穴墓出土横板鋌留短甲65
図 66	下北方 5 号地下式横穴墓頸甲・鉄鏃66
図 67	下北方 5 号地下式横穴墓出土装飾付大刀・ 垂飾付耳飾・鏡75
図 68	六野原 8 号地下式横穴墓出土眉庇付冑 (1)76
図 69	六野原 8 号地下式横穴墓出土眉庇付冑 (2)77
図 70	六野原 10 号地下式横穴墓 墳丘・主体部 構造78
図 71	六野原 10 号地下式横穴墓出土眉庇付冑79
図 72	東京国立博物館所蔵 溝下出土短甲81

表目次

III	
表 1	岡崎 18 号地下式横穴墓と北後田 1 号地下式 横穴墓の比較31
IV	
表 2	島内地下式横穴墓群の被葬者と副葬品との 関係40
表 3	えびの市島内地下式横穴墓群・小木原地下式 横穴墓群出土短甲の主要属性46
V	
表 4	島内地下式横穴墓群出土衝角付冑の主要属性47
表 5	小木原 1 号地下式横穴墓出土衝角付冑の 主要属性66
表 6	下北方 5 号地下式横穴墓出土眉庇付冑の 主要属性69
表 7	下北方 5 号地下式横穴墓出土短甲の主要属性70
表 8	六野原 8 号地下式横穴墓出土眉庇付冑の 主要属性76
表 9	六野原 10 号地下式横穴墓出土眉庇付冑 の主要属性78
表 10	溝下出土短甲の主要属性80



I 九州南部における古墳時代鉄器の研究

1. 古墳時代鉄器研究と九州南部

南の古墳築造境界領域である九州南部では、古墳そのものの発掘調査事例は多いといえないが、すでに調査数が1000基を超える地下式横穴墓から良好な鉄器の出土することがよく知られている。また、鹿児島県西北部、北薩地方を中心とする在地墓制の板石積石棺墓や同西南部の南薩地方の土壙墓など(図1)でも、鉄剣や鏃などを中心とする鉄器のみ出土することが多い。すなわち、九州南部の古墳墓の評価においては、その埋葬施設の構造以外ではひとえに鉄器の検討のみが年代や被葬者の性格などその評価に関わる可能性をもつことが多い。

また、いうまでもなく、武器・武具や農具などを中心とする古墳時代鉄器は、この時代の生産技術、地域間交流、階層や職掌といった社会的地位などを明らかにし得るものであり、それらの各型式学的な研究にもとづく評価が地域社会の動態を把握する上でも重要となる。

一般に木棺直葬や粘土槨などの副葬品が土中に包含される埋葬施設内において鉄器は、水分や塩素などさまざまな環境要因でサビが進行し、また鉄器に伴う有機質は分解され、遺存状態の不良なものが多い。一方、九州南部の、とくに地下式横穴墓は空間を保持した状態で遺存していることが多いことを反映して、サビが少なく鉄の状態が良好なものや鉄器を構成する有機質部材が良好に遺存するものの出土が多く、他地域ではみられないような良好な遺存状態の鉄器が数多く出土している。すなわち九州南部は、鉄器研究を行う上で全国的にも稀な情報を得られる重要かつ絶好の地域である。

ところで、資料の豊富に存在する古墳時代中期は、全国的に鉄器の地域性が認められにくく、非常に斉一性の高い様相が確認されているのであるが、九州南部においては列島の広域で共通する型式の鉄器とともに、それらとは異なり、この地域で個性的な様相をもつものも多々存在することが知られている。それらの多様な組合せのあり方は、斉一性の高い鉄器のみが普及する地域では認識しにくい鉄器生産体制・加工技術・流通形態などを地域側の視点から検討する上で、代え難い情報を内包しているともいえる。

このように九州南部では非常に良好な資料が数多く存在するものの、いまだ検討のおよんでいないテーマも多く、資料に即して十分に情報を咀嚼した研究が進んでいくとは言い難い。早くに調査が行

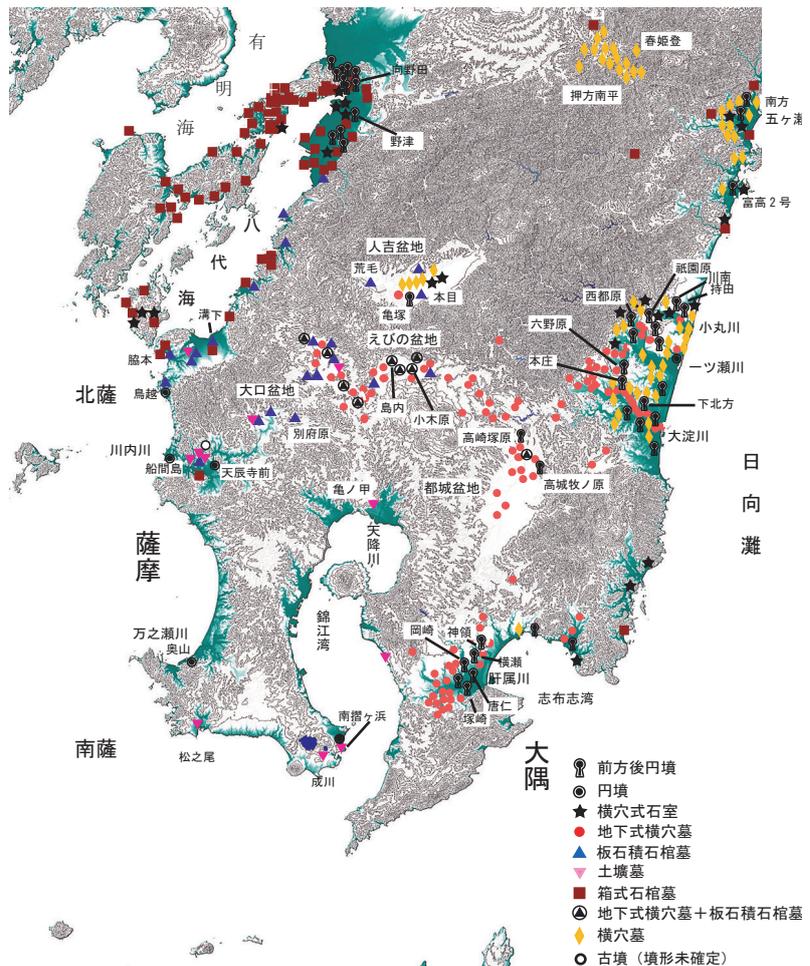


図1 九州南部の各地域と主要古墳墓

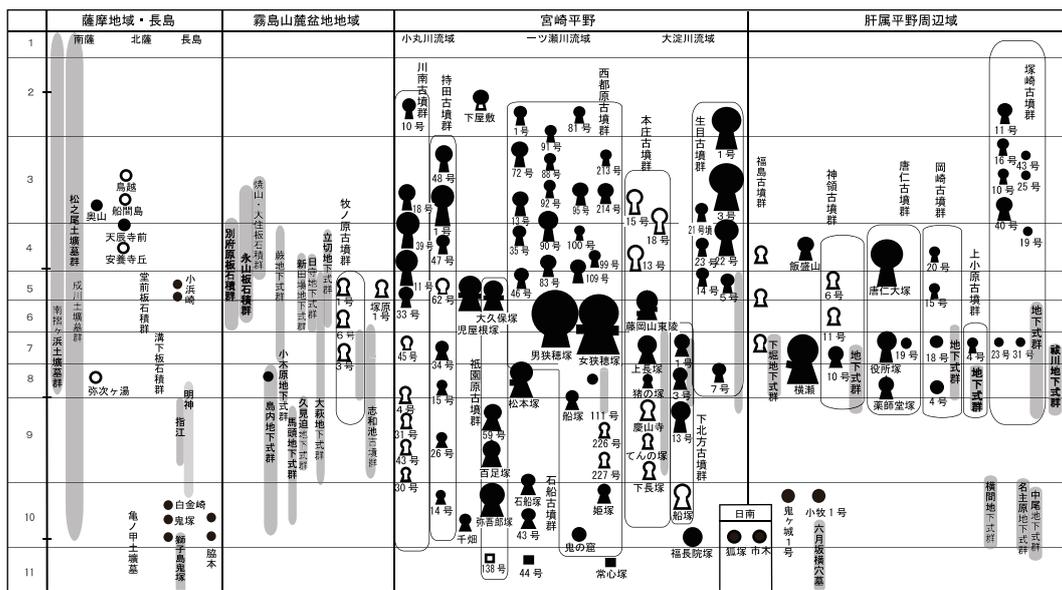


図2 九州南部の古墳墓の編年

われたもの、あるいは地下式横穴墓は緊急調査が多いこともあって、実測図や写真なども、資料の重要性を明示するには不十分であるものも多い。

そこで本研究では、重要資料でありながら十分紹介されていなかった資料の紹介およびこれまでの資料報告等で示されてきた情報とは異なる視点によって、九州南部の鉄器に関する基礎的な研究を積み重ねようとするものである。また、本研究は九州南部の古墳時代社会の考古学的研究を通じて、古代の国家形成期における境界領域の構造と展開の解明への貢献も目指している。

2. 型式学的特質

(1) 時期的推移

古墳時代鉄器資料の出土傾向は当然ながら、それを副葬する古墳墓の築造動向（図2）と関連性が高い。前期古墳の調査事例は少なく、また出土遺物が少ないこともあって、古墳時代前期の鉄器はほとんどよくわからない。前期後葉には板石積石棺墓群の築造がはじまっているとみられるが、本格的な鉄器副葬は古墳時代中期前葉になってからである。また、古墳時代中期前葉には地下式横穴墓の築造がはじまり、九州南部での副葬鉄器の量が増大する。それから古墳時代中期末までの間は、宮崎平野から都城・えびの・大口といった内陸部盆地、肝属平野にまで分布を拡げ、築造のピークを迎えるため、鉄器もこの時期の資料がとくに多い。その器種も豊富で、甲冑・刀剣・鏃などの武器・武具がとくに顕著で、なかには数多くの鉄器副葬を行うものがあらわれる。板石積石棺墓は中期中葉までをピークとしているため、中期後葉以降の資料はみられなくなる。また、中期段階には南薩地方の土壇墓などでも数多くの副葬鉄器をみることができる。

後期になると地下式横穴墓の分布圏が宮崎平野および都城盆地、えびの盆地などに範囲を縮小することとあわせて副葬鉄器の量も縮小する。また資料的には大刀・鉄鏃を中心とし、装飾付大刀や装飾馬具は地下式横穴墓からはほぼ出土せず、古墳からわずかに出土するに過ぎない。肝属平野でも後期以降の地下式横穴墓出土品はわずかし確認されていない。板石積石棺墓は後期にはみられないので副葬鉄器もないが、南薩地方の土壇墓では後期の大刀や鉄鏃を出土するものがある。

地下式横穴墓の最終段階は、TK217 型式段階であるが、この段階には大刀・馬具・鏃がわずかに知られるのみである。その後の飛鳥時代以降は良好な鉄器の出土をみない。

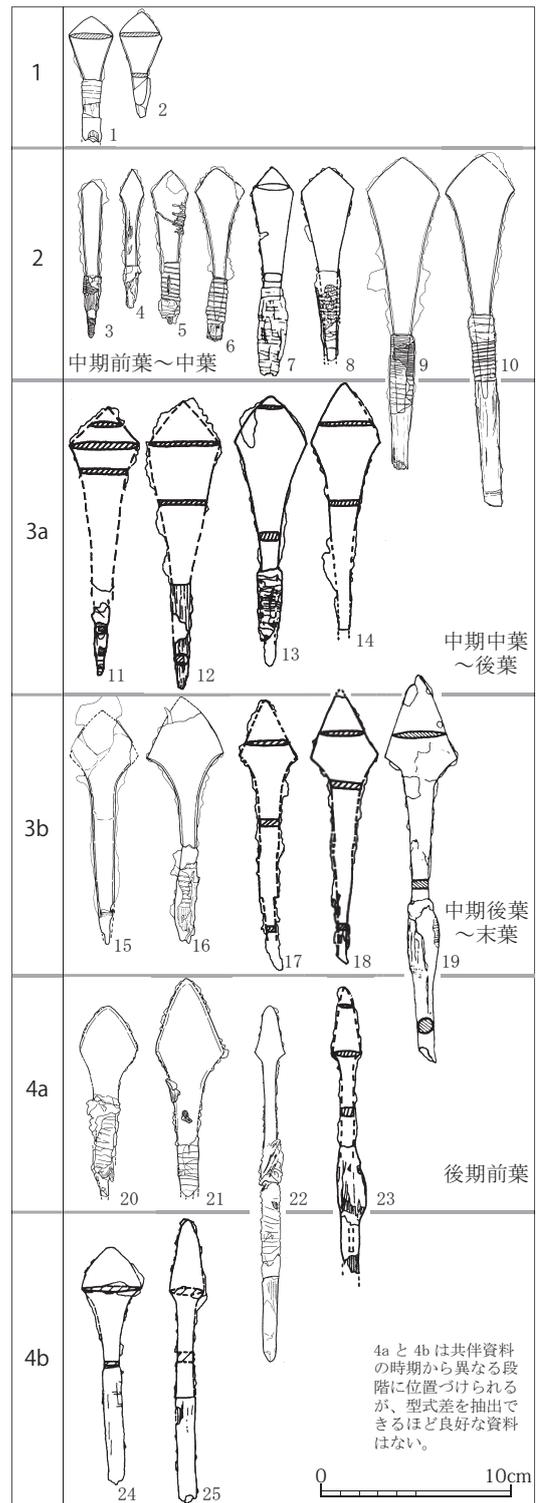
(2) 器種構成

鉄鏃 九州南部で出土する古墳時代鉄器のうち、数量的にもっとも多いのは鉄鏃である。存続期間が長く、また型式的な変化がもっとも追いやすい。そして、この地域の鉄鏃ではとくに圭頭鏃が顕著に分布することが特徴として知られている(図3)。その系譜は弥生時代後期までさかのぼるが、古墳時代中期前葉以降、数を増し、中期後葉には刃部が先鋭化した大型品、頭部は圭頭でありながら長頸化した鏃(図20)などが出現し、時間を追って九州南部で独自に型式変化することも確実である。そのため古墳時代中期段階から在地生産されていたと考えられる。

あわせて、良好な遺存状態で出土する圭頭鏃では鏃身部中央付近に鑿などを用いて刻まれた線刻の確認されることが多い。古墳時代中期に限られ、宮崎県内陸地域でとくに集中する。その具体的な意味までは明らかにし得ないが、地域の中で共有される象徴的な意味を有していたものと考えられる(鈴木2012)。

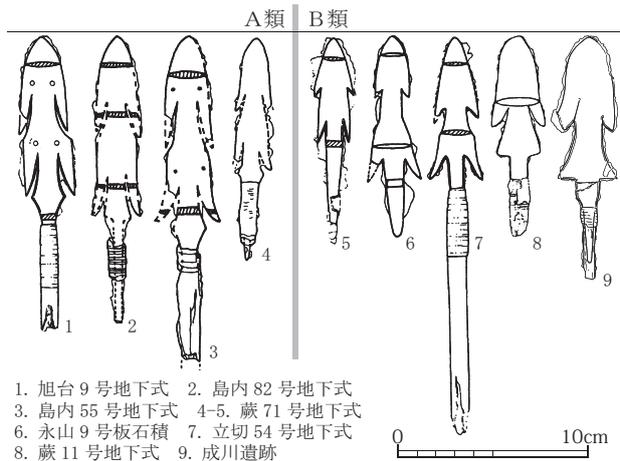
また、二段腸袂柳葉鏃などの顕著な分布も注目されてきたものである(茂山1979・橋本2003・鈴木2003)。この形式の鉄鏃は大府アリ山古墳での大量副葬に代表されるように、その分布の中心が近畿中央部にあり、中央政権との政治的紐帯を表す武器の一つと考えられる。九州南部出土例は、外方に拡がる深い腸袂をもち、関部に山形突起のみられるA類、腸袂部は鑿で切り落として作る単純な形で山形突起をもたず扁平なB類に分けられる(橋本2003)(図4)。前者は広域に分布し、中央政権からの配布などによるもの、後者は在地で模倣生産されたものであろう。この鏃には独特の形態に表される象徴性が存在し、それがまた近畿中央政権との関係性を表示するものとみなされる。しかし、同時に九州南部での顕著な分布は、この地域内において固有の意味が付加されて、独自に展開した可能性が考えられる。

古墳時代後期には列島の各地域で、個性的な鏃型式やその組合せがみられることは知られているが(尾上1993・水野1995)、ここまでにみてきたように、とくに九州南部では古墳時代中期の段階で独自型式の展開、地域で独自の意味をもたせた利用が行われたと考えられる。一方で、当然ながら九州南部の鉄鏃が地域的な型式のみからなっているわけではなく、近畿中央政権から配布されたものなど、列島の広域に共通する型式の鉄鏃も一定量含んでいる。それぞれが織りなす組合せのあり方が、古墳時代中期の近畿中央政権と地域との政治関係の強弱あるいは地域内での階層構造や先進性などと結びついているものと考えられる。



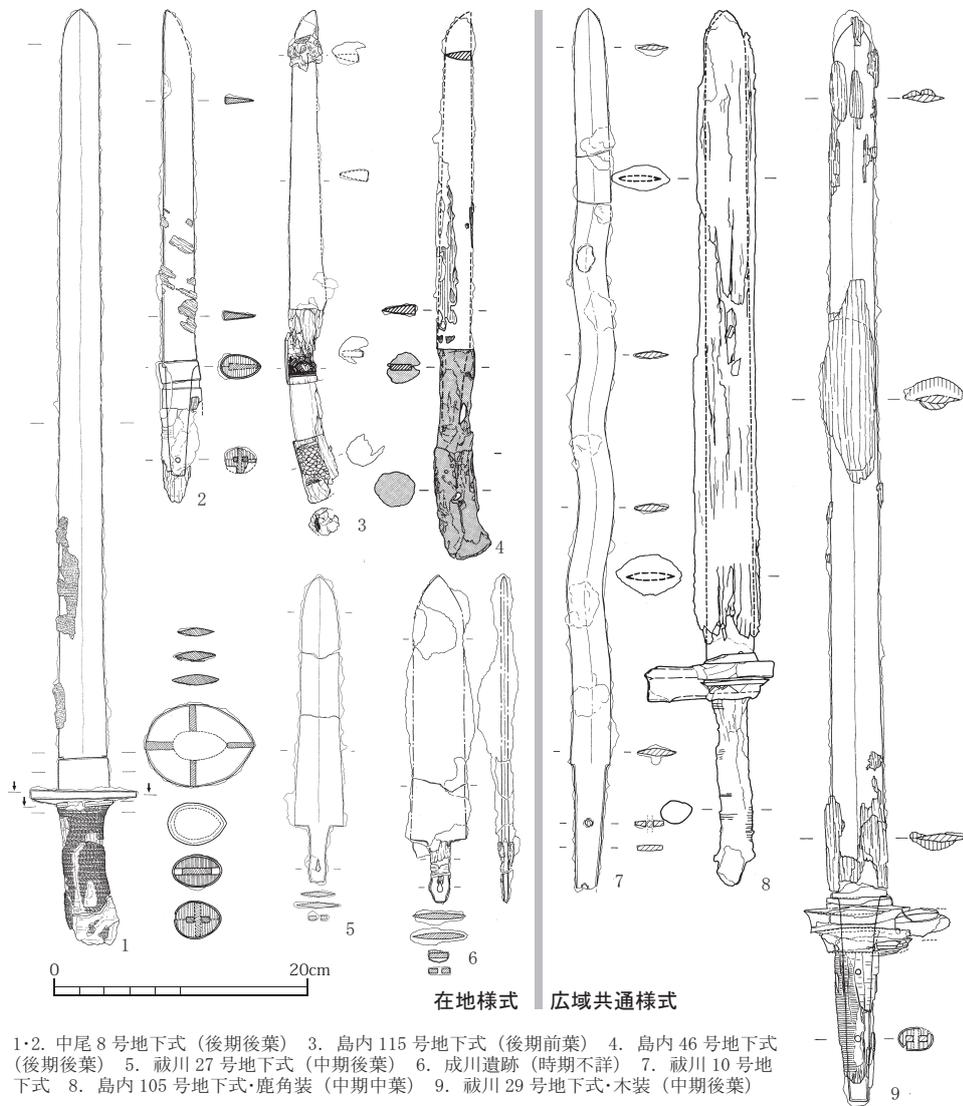
1. 蕨7号木蓋土壙 2. 蕨46号木蓋土壙 3-6・9-10. 高取原地下式 7. 蕨52号地下式 8. 芋畑6号 11-12. 島内61号地下式 13-14. 島内82号地下式 15-16. 島内76号地下式 17-18. 島内21号地下式 19. 島内10号地下式 20-22. 島内114号地下式 23. 島内41号地下式 24-25. 久見迫1号地下式

図3 九州南部の圭頭鏃の編年(えびの盆地を中心に)



1. 旭台9号地下式 2. 島内82号地下式
3. 島内55号地下式 4-5. 蕨71号地下式
6. 永山9号板石積 7. 立切54号地下式
8. 蕨11号地下式 9. 成川遺跡

図4 九州南部の二段腸快鏃



- 1・2. 中尾8号地下式(後期後葉) 3. 島内115号地下式(後期前葉) 4. 島内46号地下式(後期後葉) 5. 祓川27号地下式(中期後葉) 6. 成川遺跡(時期不詳) 7. 祓川10号地下式 8. 島内105号地下式・鹿角装(中期中葉) 9. 祓川29号地下式・木装(中期後葉)

図5 九州南部の刀剣類

刀剣 鉄鏃に次いで中心となるのは刀剣類である。九州南部では古墳時代中期まではほとんどが鉄剣で大刀は少ない。また、古墳時代後期には列島全体的な傾向として大刀が主体になり、剣をほぼみなくなるが、この地域では剣が後期にも存続している(図5-1・図16)。

古墳時代中期の鉄剣の中には、列島全体で通有の木装ないし鹿角装の有段有突起B類剣や短剣が数多く確認されるが、一方で、刃部幅が広いわりには、全長が短く、にもかかわらず茎は細長く、目釘孔が縦長で大きく周囲の茎形が変形するようなタイプが大隅・薩摩でみられる(図

5-5・6)。これはヤリの可能性があるが、それにしてもその形態的バランスは独特である。

また、大刀では古墳時代後期に位置づけられるだろうが、刃部幅のわりに刃部長の短い小刀タイプなどがある(図5-2)。えびの市島内地下式横穴墓群出土の小刀には柄縁から柄頭まで一体式の鹿角装具などもある(図5-3・4)。

さらに、この地域では蛇行剣が列島全体の中でもとくに集中することが知られており(図5-7)、地域の独自性あるいは地下式横穴墓とともに「隼人」などとも結びつけられてきた。

蛇行剣という形態

やこの剣のもつ意味は、本来、九州南部に独自のものではなく、近畿中央部から列島全体的に共有されたものである。しかし、それでも九州南部に集中すること確かであり、そこにはこの地域内での付加的な価値が加わることによって、保有を促すような背景があるのだろう。

鹿角装具を付した刀剣は（図 5-8）、列島全体的にみてもえびの・小林盆地といった宮崎県内陸部の西諸県地域が、とくに集中する地域である。有段有突起 B 類装具を基本とし、直弧文の観察できるものも多く、近畿中央政権との関わりが想定できる。中央政権の政策的な配布に関わるものであろうが、それにしても著しい分布を示す。その遠因として地下式横穴墓の分布密度と発掘調査事例が多いことにも関連するではあろうが、ただ、これも蛇行剣と同様にその受容を積極的に進めるようなその価値の再構成が地域内で行われている可能性は高いであろう。

鉄鏃同様に、刀剣類にもとくに古墳時代中期には近畿中央政権との直接的な政治的関係性を示すものが含まれる一方で、また地域独自の刀剣も加わり、それ自体に地域内での固有の価値が与えられたり、その保有が地域集団内での階層や身分などを表示した可能性が考えられる。

甲冑 九州南部の古墳時代中期を特徴づけるものとして、甲冑はもっとも注目されてきた副葬品である。中期の、とくに帯金式甲冑は、鉄板造りの高度な技術からなり、地方様式がなく、かつその分布の中心が古市・百舌鳥古墳群とその周辺にあることから、これらの古墳群の被葬者を中心とする近畿中央政権の下で一元的に生産され、また政治的に配布されたものとみて間違いはない。

九州南部は全国的にみても、この帯金式甲冑の分布の集中地域のひとつであることがよく知られる（図 6）。その分布域は、宮崎平野・都城盆地・えびの盆地、肝属平野といった九州東岸ルートに連なる地域で濃厚に分布している。西岸ルートでは、出水平野を南限とするが、これは天草諸島域での動向と連なるものであろう。また人吉盆地でも確認されている。

九州南部出土の甲冑としては、とくに鉾留甲冑の著しい出土が特徴としてあげられる。おおむね、革綴甲冑は古墳からの出土が主体で、地下式横穴墓からの出土はほとんどが鉾留短甲である。

地下式横穴墓出土甲冑としては、国富町木脇塚原 A 号地下式横穴墓出土例が、冑・短甲ともに革綴で、最初期のものと位置づけられるが、ほかに革綴甲冑は国富町六野原 8 号地下式横穴墓の三角板革綴短甲と西都原 4 号地下式横穴墓の横矧板革綴短甲しか存在しない。六野原 8 号地下式横穴墓で共伴する眉庇付冑は、この冑のなかでは新相のもので、時期的には鉾留段階のものである。また、西都市西都原 4 号地下式横穴墓の横矧板革綴短甲は、横矧板鉾留短甲の存在を前提として特殊甲冑として生み出された帯金式甲冑最新相のものである。すなわち、革綴段階の甲冑セットの副葬は木脇塚原 A 号地下式横穴墓のみであり、地下式横穴墓と近畿中央政権との関係が濃密になるのは、これより後のとくに中期後葉である。一方で、中期前葉～中葉に革綴甲冑は延岡地域顕著な集中がみられ、近畿中央政権と九州南部の勢力の関係にも変動をあったことが読み取れる（橋本 2003, pp. 197-198）。

中期後葉の甲冑では、えびの盆地、島内地下式横穴墓群と小木原地下式横穴墓群での顕著な集中がとくに注目できる。横矧板鉾留短甲の出土が著しく、冑をセットに伴うものはあるが短甲 1 領副葬が多く、また頸甲の出土がないこと、複数領副葬もないこと、横矧板鉾留短甲に三角板革綴衝角付冑という明確な時期差をもつ特異なセットや短甲がなく冑のみ出土するものがあることなど、セット関係が特殊で個性的である。

また、宮崎平野部では六野原 6 号墳が横矧板鉾留短甲に三角板革綴衝角付冑・革綴頸甲をセットとしている。また、六野原 10 号地下式横穴墓は横矧板鉾留短甲に小札鉾留眉庇付冑をセットとしており、ともに冑が甲よりも古いという時期差のある組合せがみられる。六野原 8 号地下式横穴墓では、三角板革綴短甲に小札鉾留眉庇付冑がともない古相の短甲に新相の眉庇

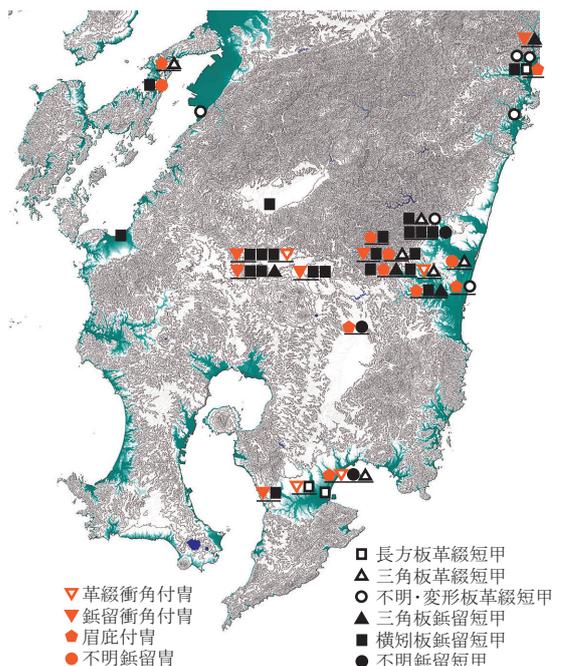


図 6 九州南部の中期甲冑分布

付冑が組み合わされている。

これらとくに甲冑集中古墳墓群でみられるセットの乱れと認識できる時期差のある組合せ、この辺りに中央政権からの評価において格差があったと読み取ることが可能である。このような様相は甲冑の保有者層の中で、高い地位を想定できないだろう。近畿中央政権の軍事組織の中で、社会的地位や政治的な紐帯に基づいて配布されたというよりも、実際の軍事的活動にともなう功績や恩賞などといった体系的でない配布によるものではなかろうか。

一方で、九州南部ではこのような甲冑配布以外に、短甲2領・眉庇付冑・頸甲を出土した宮崎市下北方5号地下式横穴墓、横矧板革綴短甲1領を含む短甲3領を出土した西都原4号地下式横穴墓、短甲・冑2セット・頸甲・篠状鉄札をもち、冑には金銅装眉庇付冑を含む大崎町神領10号墳など、同時期の中でも上位階層と考えられる古墳墓がある。宮崎平野・肝属平野の盟主的首長であり、かつ、いずれも近畿中央政権から九州内では傑出した地位を与えられた被葬者が想定されるものである。

沿岸部平野と内陸盆地地域、甲冑を保有しながらそこに階層的な上下の関係がみられることは確かである。この両者の違いには、近畿中央政権による評価の違いから配布される甲冑に差異が生じているのか、あるいは中央政権からの甲冑が平野地域から盆地地域へ2次的に配布されたことを物語るのか、いくつかの考え方が生じる余地がある。

しかし、近畿中央政権のシンボルである帯金式甲冑はその授受を介して政権との政治的関係の確認・承認を表示するものであること、甲冑は数・質で序列関係を表すものであるから（橋本2014, pp. 266-267）、一見してこの下位に位置づけられるこの独特のセット関係も、近畿中央政権との関係を表すものであり、平野部の首長墓との質的な差異を表すものであっても、その差配は中央政権が行ったとみるのが妥当である。島内や小木原地下式横穴墓などは、個別に中央政権との軍事に関わる特殊な結びつきをもち、甲冑を入手したのであろう。

馬具 1990年代後半に、宮崎・鹿児島馬具に関しては宮代栄一が総合的な検討を行っており（宮代1995・1997）、その後の資料の増加はあるが評価は大きく変わらない（図7）。すなわち、九州南部では比較的良好な古墳時代中期の資料が多く、鑣轡や環板轡などが出土しており、馬具、乗馬が早い段階にもたらされていることが特徴の一つである。さらに、島内SK02や小木原3号地下式横穴墓などf字形鏡板付轡も鉄製品しか出土せず、また島内SK02出土の杏葉も鉄製であること、鉄製内湾楕円形

鏡板付轡が杏葉を伴わずに7例ほど出土していることなど、装飾性を欠く実用本位の馬具が多いことも特徴として加えられる。

大局的に見ると古墳時代中期にはえびの盆地の地下式横穴墓群・六野原古墳群で、古墳時代後期には宮崎平野を中心に分布する。また近年、宮崎平野部での馬埋葬土壌の増加が著しい（甲斐2009）。なかには、宮崎市山崎下ノ原第1遺跡SC16での金銅装（銀被鋳）内湾楕円形鏡板付轡・同棘葉形杏葉・銀被鋳扁平有稜鉢雲珠・同辻金具といった装飾馬具の出土もあるがこれは例外で、後期の鉄製環状鏡板付轡を出土するものが多い。以前から指摘のあるように宮崎での馬具・馬埋葬土壌は牧の設置と関連する可能性が高く、むしろ首長間関係を表す威信財的な馬具の少ないことが特徴である。なお、一部に伝百塚原出土や持田56号墳などの優れた装飾馬具があるが、宮崎平野部に集中するのは後期首長墓の築造動向とも連動するものであろう。

胡籐 胡籐は神領10号墳、鹿屋市祓川29号地下式

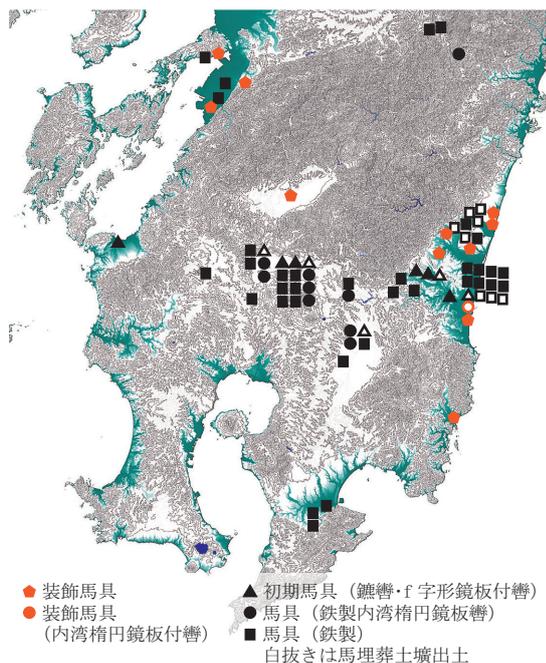


図7 九州南部の馬具分布

横穴墓、島内10号地下式横穴墓、新富町石船塚古墳で出土している(図8)。神領10号墳例は三連吊手金具をもつ新羅製舶載品である。前方後円墳で優れた甲冑セットの存在などからも、上位首長層の副葬品として理解できる。

祓川29号地下式横穴墓は小型の地下式横穴墓で、島内10号地下式横穴墓も特別ではない地下式横穴墓である。前者は有段有突起B類剣を有し、後者は直弧文のある鹿角装の剣・長頸鏃を有しており、胡籙とともに武器セットとして外部社会との接触、とくに朝鮮半島に連なる活動、ネットワークの中で入手したものと考えられる。

刀子・農工具 刀子は数多く出土するがその評価は難しい。工具ではヤリガンナ・鉄斧・鏝などが出土しているが総じて九州南部での出土例は少なく、基本的な副葬品組成の中には加えられていない。なお、島内地下式横穴墓群では鹿角装具をつけたヤリガンナ・鏝があるが、類例のない個性的な工具である。農具は沿岸平野部を中心に鎌や鋤鋤先などが出土するが、えびの盆地でまったく出土していないことには、意図的な選択性が働いていることをうかがわせる。そこには、生業における稲作農耕の比重が反映されている可能性を考えておきたい。その反面として、武器への特化がより明確に浮かび上がるだろう。

異形鉄器 南薩の指宿市成川遺跡の調査で最初に認識されたものであるが(図9下段右3点)、その他に大隅の曾於郡大崎町

下堀2号地下式横穴墓、西諸県地域の小林市松之元でも出土例がある。また、近年の鹿屋市立小野堀地下式横穴墓群での発掘調査でも出土している。

基本的には平根系の無茎・有茎鏃を大型に変異させた儀仗的な武器の一種であろう。古墳時代中期を中心とするものと考えられるが、古墳社会とは一定の隔たりをもったネットワークの中で生産され、流通しているようで、九州南部、とくに大隅・薩摩地域を中心に独自に発展した鉄器として捉えられる。

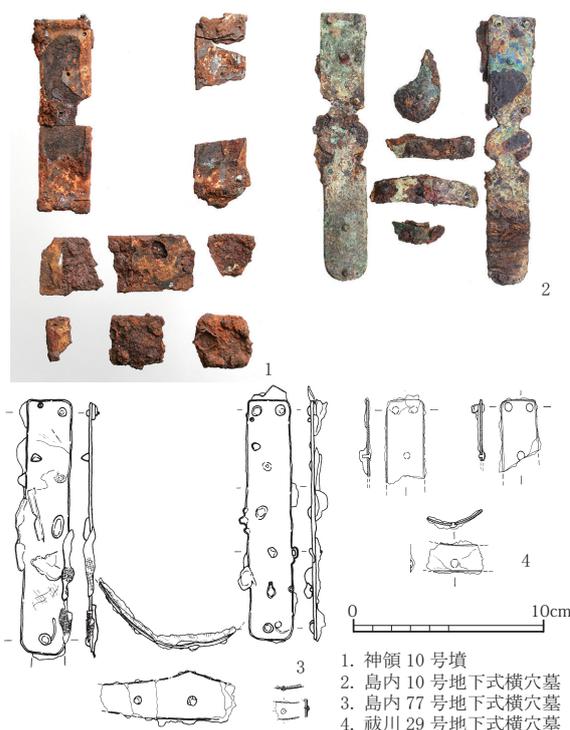


図8 九州南部の胡籙

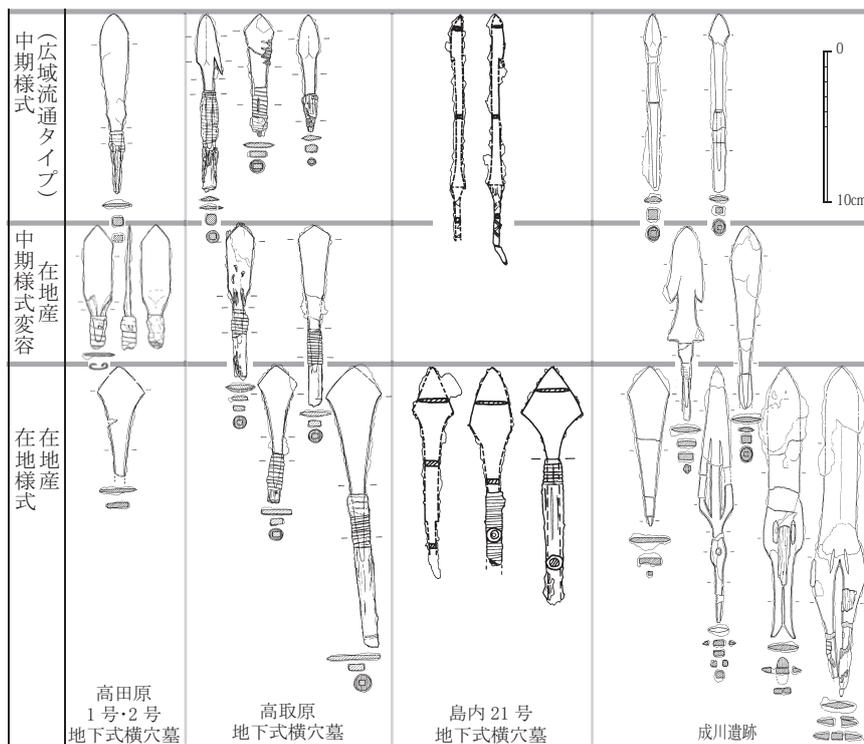


図9 九州南部における鉄鏃の各種様式

3. 九州南部における鉄器生産

九州南部の武器生産と地方様式 九州南部の鉄器生産を考える上では、資料数が比較的多く、また型式学的研究の進んでいる武器の検討がその実態を解明する上で重要である。一般的に古墳時代中期の武器は地域性が顕著でなく、むしろその広域の斉一性を特徴とするため、地域性が捉えにくいことによって、従来は畿内一元生産を軸に考えられることが多かったが、鉄器の生産様相を捉える上で、その斉一性から逸脱するような鉄器が見られる九州南部の状況はある意味、示唆的である。

上にもふれたように、九州南部では古墳時代中期前葉には、鉄板をカットして刃を付けたような技術レベルの高くない圭頭鏃がある。あるいは鳥舌鏃を指向し、形態は模倣しながらも技術的には圭頭鏃の薄い鉄板加工技術によっているため再現性の低いコピー製品ともいえる在地変容品も生み出されている(図9)。二段腸袂柳葉鏃でも同様の現象があり(図4)、さらにまったくオリジナルな異形鉄器など、在地独自様式の鉄製武器が数多く展開する。これらは基本的に鉄板の裁断、単純な鍛打、研磨といった技術で製作できるもので、断面は刃部と茎部ともに鉄板の原形を反映した長方形を基本とする。それに対して、中期の中央政権下に発せられた情報に基づく斉一性をもった鳥舌鏃や短頸鏃などの鉄鏃は複雑なカーブや厚み、深い切り込みなどをもつことが多く、鏃身部断面形は菱形・レンズ形・片鏃・片丸、茎部断面は方形とするものが多い。

都城盆地からえびの盆地付近ではとくに出土資料も多く、また圭頭鏃に自律的な型式変遷を追求こともできるので、この地域では活発な鉄器生産があったとみなされる。なかでも、えびの市島内地下式横穴墓群では、甲冑や刀剣、長頸鏃などで明らかに近畿中央政権から配布されたような武器武具を多量に副葬する一方で、独自に発達する圭頭鏃や剣、小刀、独特の鹿角装具、骨鏃など特徴的な副葬品が顕著でかつ数多く存在する。

この墓群近くでは、その造営者達の集落である可能性の高いえびの市内小野遺跡で鍛冶遺構・羽口・金床石、取鍋、鉄鋌片が出土している。近在する妙見遺跡では堅穴住居から高杯転用羽口とともに鑄造鉄斧片、天神免遺跡でも高杯転用羽口や鉄床石などが出土しており、地域内で鉄器生産が頻繁に行われていたことは確実である(図10)。在地で刀剣・鏃といった武器や刀子などが生産されたのであろう。



図10 えびの市内小野遺跡の出土遺物

古墳時代中期の甲冑は近畿中央政権下の工房で一元生産され、政治的な配布がなされたと考えられる。しかし、刀剣類レベル以下の武器は中央政権下での生産・配布のほか、奈良県布留遺跡・名柄遺跡、大阪府陵南北遺跡などの近畿の有力首長層麾下の工房のほか、福井県河合寄安遺跡・宮城県山王遺跡のような地方の有力首長麾下の工房でも生産された可能性が高い。

すなわち、各地方でも古墳時代中期には近畿中央部の工房での技術伝習やあるいは工人派遣を受けうて、ある程度、共通規格の、斉一性の高い刀剣・鏃等の武器の再現は可能であったのである。ところが、

九州南部のみは他地域と比べて鍛冶技術に明らかなレベル差が生じていたこと、あるいは共通規格品を再現する規範意識が低く、本来の近畿中央部から発せられた情報を再現しなかったために独自様式の武器が目立っているのもあって、逆にいうと刀剣鏃などの武器に独自様式が発現している中期前葉には九州南部であっても、その生産がはじまっていたことが確実である（橋本 2003, pp. 200-204）。

一般的に鉄器の地方生産は古墳時代後期以降、地方様式の顕在化によって把握しやすくなるが、古墳時代中期には大隅・薩摩でも鍛冶工房が広く分布することからすれば（黒川 2012）、九州南部を除く、古墳時代中期の近畿中央政権に連なる列島社会では、再現されるべき武器型式の規範を厳格に踏襲することが強く求められたために、独自型式が乱立することなく、広域で斉一性が維持されていたのである（水野 2003, pp. 139-140）。一見、地域性が捉えにくい地域にあっても、在地生産を念頭に入れた鉄器の再点検が必要であろう。

4. 九州南部における古墳時代鉄器の展開

弥生終末期～古墳前期の鉄器 まとめとして時代を追って鉄器の様相を確認しておきたい。九州南部においても弥生時代中期後半には鉄器が出現し、後期後半以降、普及範囲は拡大したと考えられる（図 11）。新富町川床遺跡では弥生後期後半以降、弥生終末～古墳時代前期を中心とする鉄器が土壙墓群から数多く出土しており、その器種も鉄剣・鉄刀・素環頭刀・鉄鏃・鉄斧・ヤリガンナ・刀子と豊富である。

薩摩地域でも指宿市南摺ヶ浜遺跡の刃関双孔を有する剣、南九州市堂園 A 遺跡の円孔をもつ柳葉鏃など弥生終末期の墓から鉄器が出土しており、古墳時代の開始期までにはすでに一定の鉄器普及がみ

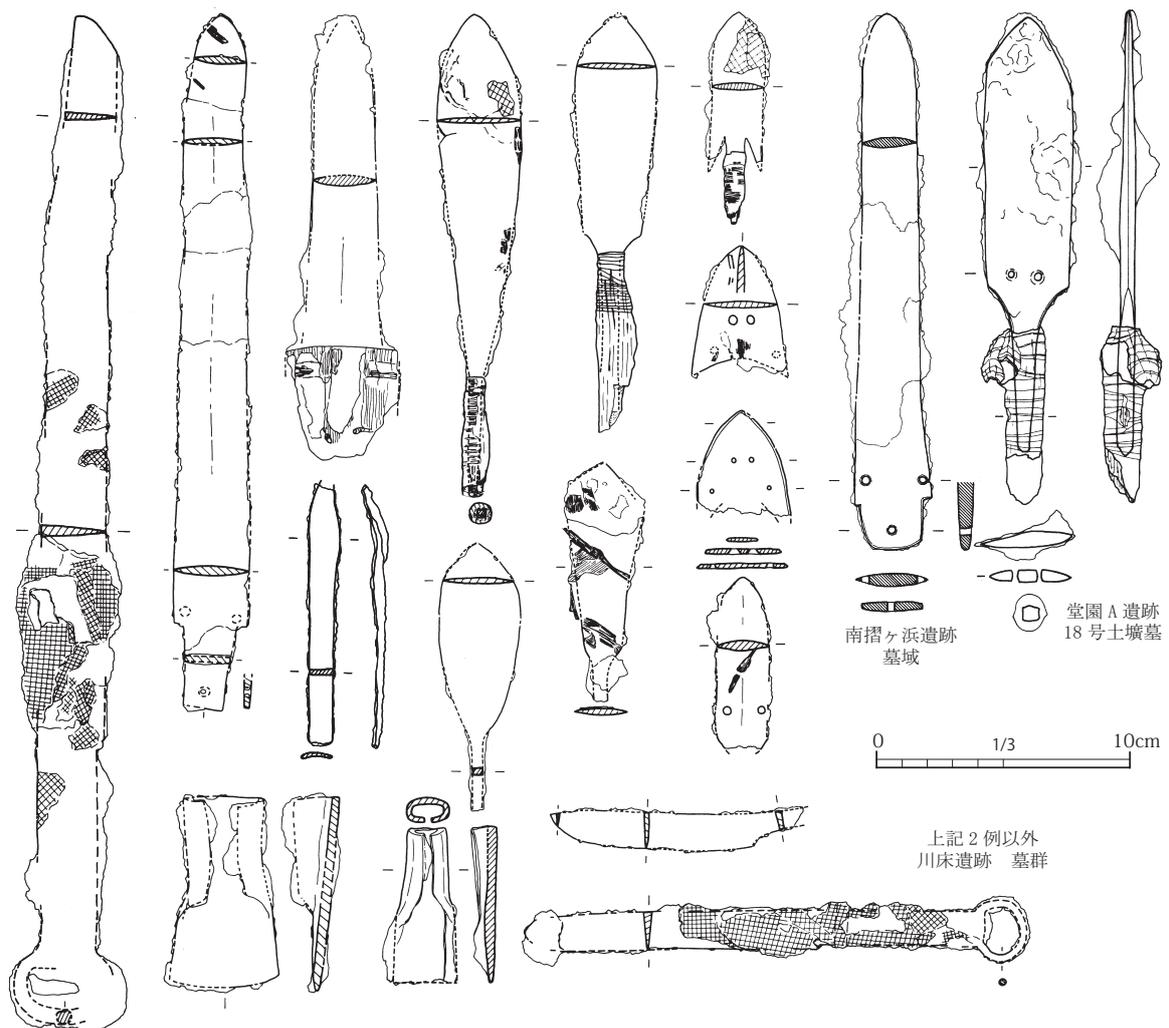


図 11 九州南部の弥生終末～古墳前期の鉄器

られる。

ところが、古墳時代前期の古墳副葬鉄器に関しては、ごくわずかしか実体が判明していない。宮崎平野で内容の明らかなものとしては、下屋敷古墳の鉄剣・圭頭鏃各1点があるのみで、西都原13号墳や72号墳で鉄剣などが出土した記録はあるが、現状でその資料実体は不明である。埋葬施設の調査がなされた薩摩地域の前期古墳、鳥越古墳では鉄器は出土せず、天辰寺前古墳では刀子1本、奥山古墳で鉄剣・刀子各1点が確認できるのみである。なお、北薩地域の板石積石棺墓やえびの市蕨遺跡の木蓋土壙墓・木棺墓のなかには、古墳時代前期に位置づけられる小型の圭頭鏃や柳葉鏃を出土するものがあるが（藤井2009・図3-1・2）、ただ、これも鏃が数点出土するのみといった出土状況である。

数多く存在する古墳の埋葬施設は明らかになっていないため、これで評価することは難しいが、少なくとも有稜系鉄鏃、銅鏃、農工具といった前期古墳に特徴的な副葬品がこれまでまったく出土していないことに、むしろ意味を見出し得る可能性はある。一部の古墳で三角縁神獣鏡などは出土しているが、鉄器やあるいは石製品などの近畿中央政権との強い関係を示すような副葬品が断片的にもみられないことはこの地域の前期古墳の多さと比較すると違和感があり、そこには中央政権との関係の強弱や評価の高低などのあり方を反映されているものとして注意しておく必要がある。

古墳時代中期の鉄器 これまでにみてきたように、もっとも鉄器資料の充実するのが古墳時代中期である。とくに、甲冑を中心とする近畿中央政権との紐帯を顕示する武器・武具の数多くみられること、多様な地域様式の鉄器のみられることが特徴である。

古墳・地下式横穴墓・板石積石棺墓・土壙墓といった各古墳墓から鉄器の出土がみられる。なかでも、注意が必要なのは、甲冑などの際立つ副葬品が出土する地下式横穴墓は、六野原古墳群・地下式横穴墓群や島内地下式横穴墓群など限定された存在であって、この地域の地下式横穴墓すべてに共通することではない。とくに、島内地下式横穴墓群は、九州南部の地下式横穴墓の代表のような紹介をされている記述などをみかけることがあるが、甲冑を出土するような地下式横穴墓は全体の中では稀少である。地下式横穴墓には、下北方5号地下式横穴墓や西都原4号地下式横穴墓のような列島全体で見ても傑出する副葬品内容をもつ首長墓もあれば、副葬品をもたないような集団墓群として構築されたものも多い。ひとえに地下式横穴墓といってもその内部には、階層性・地域性などが複雑に存在し、すべてを一括した捉え方はできない。むしろ、全体の中では副葬品をもたないか、わずかしかもたないような地下式横穴墓の方が大部分であることは注意しておかねばならない。

古墳後期～終末期の鉄器 この時期になるとまた、地下式横穴墓の構築数の減少に伴って鉄器も減少する。鏃・大刀・馬具が主要鉄器であるが、とくに地下式横穴墓では後期前葉の島内114号地下式横穴墓の龍文象眼大刀を除くと、装飾大刀の出土が少なく、とくに環頭大刀といった近畿中央政権との関係における主要形式は古墳でしか出土していない。甲冑も確実な出土事例は後期初頭の西都原111号墳のみである。装飾馬具など、後期には目立った副葬品をもつ地下式横穴墓がみられず、中期には九州を代表する首長墓にも用いられたこの墓制が、後期段階には階層的には下位の集団墓として、その性格に古墳とは差異が生じはじめていたことがうかがえる。

古墳・地下式横穴墓の性格自体が中期から後期の間では大きく変化したことが副葬品からも読み取れ、やがて終末期を以て両者ともその終焉を迎えるのである。

最後に 以上、はじめにも述べたように、この地域の鉄器は、古墳の年代や性格を位置づける上で、もっとも重要な遺物であり、鉄器のみでしか語れないことが非常に多い。いまだ、基礎的な資料整理・評価も不十分な資料が多く、また列島全体の中での比較やあるいは朝鮮半島の併行期資料との比較検討など、今後さらに多岐にわたる検討が必要であり、より一層深めなければならないテーマであることは言を俟たないだろう。

引用文献は次章に含む。

II 九州南部の主要古墳時代鉄器関連研究文献一覧

文献収載にあたって

ここでは九州南部の鉄器および金属器を素材とした研究、あるいはその出土古墳墓に関する研究文献を掲出した。基本的には研究書および雑誌等を中心に収載しており、報告書および資料報告は取り上げていない。ただし、報告書中の考察は取り上げている。また、保存修復の技術・工程などの説明を主題としたものには収載しなかったものがある。

冊子体で刊行・頒布された図書や予稿集に関しては収載しているが、レジュメ・会報など一般的に図書としての利用が困難な資料に関しては基本的には収載していない。

研究文献

- 有馬義人 2001 「宮崎県出土の環頭大刀集成」『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会 pp.45-55
- 池畑耕一 2003 「蛇行剣に関する諸問題」『考古学ジャーナル』No.498 ニュー・サイエンス社 pp.4-5
- 諫早直人・甲斐貴充 2010 「伝 六野原古墳群出土の鎌轡について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第6号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.40-48
- 大西智和 2003 「出土品にみる蛇行剣の意義—えびの市島内地下式横穴墓群の場合—」『考古学ジャーナル』No.498 ニュー・サイエンス社 pp.13-17
- 2014 「地下式横穴墓出土の蛇行剣の性格」『Archaeology From the South II』新田栄治先生退職記念事業会 pp.239-250
- 大西智和・鐘ヶ江賢二 2008 「鹿児島県長島明神・指江古墳群出土遺物の検討」『人類史研究』Vol.14 人類史研究会 pp.97-109
- 乙益重隆 1974 「鉄器・鉄製品」・「成川遺跡の鉄器・鉄製品について」『成川遺跡』文化庁 吉川弘文館 pp.70-108・125-146
- 面高哲郎 1979 「地下式横穴墓出土遺物の紹介(1)—鉋—」『研究紀要』昭和54年度 No.5 宮崎県総合博物館 pp.23-31
- 甲斐貴充 2009 「宮崎県における古墳時代の馬埋葬土壌」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第5号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.10-25
- 2010 「古墳時代宮崎県出土の鉄鐸資料」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第6号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.32-39
- 2011 「宮崎県出土の胡籐金具二例」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第7号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.1-7
- 2012 「宮崎県持田古墳群出土三葉環頭大刀について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第8号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.35-42
- 2013 「宮崎の古墳副葬品にみる半島系資料」『韓国中原地域と南九州の古墳文化 発表要旨集』宮崎県立西都原考古博物館 pp.61-68
- 上村俊雄 1999 「地下式横穴墓出土の甲冑」『人類史研究』11 人類史研究会
- 北山峰生 1999 「副葬された蛇行剣—意義と特質に関する予察—」『石ノ形古墳』袋井市教育委員会 pp.315-346
- 2003 「蛇行剣の分布と変遷」『考古学ジャーナル』No.498 ニュー・サイエンス社 pp.6-9
- 黒川忠広 2012 「鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介」『縄文の森から』第5号 鹿児島県立埋蔵文化財センター pp.16-27
- 小林謙一 1979 「地下式横穴墓の甲冑と大和政権」『特別展 日向の古墳展—地下式横穴墓の謎を探る—』宮崎県総合博物館報告29 宮崎県総合博物館 pp.38-39
- 茂山 護 1979 「二段逆刺を有する鉄鎌について—地下式横穴出土鉄鎌集成覚書(1)」『研究紀要』昭和54年度 No.5 宮崎県総合博物館 pp.1-20

- 茂山護・面高哲郎 1981「本庄第 28 号地下式横穴—東諸県郡国富町宗仙寺地下式横穴—」『宮崎考古』第 7 号 宮崎考古学会 pp. 31-40
- 嶋田史子 2010「大萩 38 号地下式横穴墓出土遺物について—繊維痕跡を中心に—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 6 号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 25-31
- 2012「旭台地下式横穴墓出土鉄鏃における X 線 CT 撮影を用いた線刻・穿孔判断の有効性について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 8 号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 69-73
- 嶋田史子・赤田昌倫 2011「大萩 37 号地下式横穴墓出土鉄鏃に残る繊維と黒色物質について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 7 号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 15-18
- 秦 憲二 2003「南九州における古墳時代鉄鏃の様式構造」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古学会 pp. 65-84
- 鈴木一有 2002「九州における古墳時代の鉄鏃」『考古学ジャーナル』496 ニュー・サイエンス社 pp. 8-11
- 2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集 pp. 49-70
- 2003「二段逆刺鏃の象徴性」『静岡県考古学研究』No. 35 静岡県考古学会 pp. 73-90
- 2012「線刻鉄鏃の系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集 国立歴史民俗博物館 pp. 457-475
- 鈴木重治 1960「日向の鉄器 (1)—資料篇—」『古代学研究』25 古代学研究会 pp. 23-25
- 高木恭二 1981「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城二号墳』城二号墳発掘調査団・宇土市教育委員会 pp. 44-71
- 1982「圭頭斧箭式鉄鏃再考」『肥後考古』2 肥後考古学会 pp. 36-41
- 田中 茂 1977「国富町塚原地下式横穴 A 号出土遺物—長方板革綴衝角付冑他—」『宮崎考古』第 3 号 宮崎考古学会 pp. 14-21
- 1988「南九州出土の蛇行剣」『宮崎県史研究』第 2 号 pp. 29-46
- 千賀 久 2012「象眼大刀と馬の墓」『シンポジウム 島内地下式横穴墓群出土品の評価と被葬者像』予稿集 えびの市教育委員会 pp. 15-20
- 戸高真知子 1995「川床遺跡出土の線状孔のある鉄鏃」『宮崎考古』第 14 号 宮崎考古学会 pp. 60-61
- 中村友昭 2010「古墳時代後期のイモガイ装馬具に関する基礎的研究—築池 2003-3 号地下式横穴墓出土例をもとに—」『先史考古学論究』V 龍田考古会 pp. 503-523
- 西健一郎 1988「地下式板石積石室墓出土鉄鏃の編年的検討」『鹿児島考古』第 22 号 鹿児島県考古学会 pp. 91-99
- 西嶋剛広 2014「甲冑から見た九州と倭王権との地域間交流」『古墳時代の地域間交流 2』第 17 回九州前方後円墳研究会 同実行委員会 pp. 115-139
- 二宮満夫 2005「副葬された鉄製農具—宮崎県における 5～7 世紀の資料—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 1 号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 1-7
- 橋本達也 2002「九州における古墳時代甲冑—総論にかえて—」『考古学ジャーナル』496 号 ニュー・サイエンス社 pp. 4-7
- 2003「副葬鉄器から見る南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会 pp. 197-218
- 2006「九州における古墳時代前期の鉄製品」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会 pp. 27-48
- 2005「牧ノ原古墳群出土鉄製品の意義」『牧ノ原遺跡群』高城町教育委員会 pp. 42-43
- 2005「下堀地下式横穴墓群と南限の古墳時代社会」『下堀遺跡 大崎細山田段遺跡』大崎町教育委員会 pp. 210-213
- 2006「唐仁大塚古墳考」『鹿児島考古』第 40 号 鹿児島県考古学会 pp. 76-91
- 2007「九州の中期甲冑」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会 pp. 47-58
- 2008「岡崎 18 号墳出土鉄製品と肝属平野周辺域をめぐる広域交流」『大隅串良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp. 269-276
- 2008「九州における古墳時代後期の甲冑と鉄鏃」『後期古墳の再検討』第 11 回九州前方後円墳研究会 同実行委員会 pp. 39-60
- 2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文学部 pp. 91-107
- 2010「九州南部の首長墓系譜と首長墓以外の墓制」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方

- 後円墳研究会 pp. 237-284
- 2012 「九州南部における島内地下式横穴墓の位置づけ」『シンポジウム 島内地下式横穴墓群出土品の評価と被葬者像』予稿集 えびの市教育委員会 pp. 27-32
- 2014 「西都原4号地下式横穴墓出土の装身具」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第10号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 50-57
- 橋本達也・藤井大祐 2005 「小考—高取原地下式横穴墓出土鉄鏃の意義—」『高取原地下式横穴墓』高城町教育委員会 pp. 24-28
- 2007 『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp. 88
- 東 憲章 1993 「南九州における甲冑出土古墳の様相」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第33回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 pp. 44-51
- 1994 「地下式横穴墓の副葬品」『考古学ジャーナル』No. 380 ニュー・サイエンス社 pp. 21-25
- 1996 「地下式横穴墓の基礎的研究」『西野元先生退官記念論文集 考古雑渉』西野元先生退官記念会 pp. 168-186
- 2001 「地下式横穴墓の成立と展開」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第1分冊九州前方後円墳研究会 pp. 497-504
- 2005 「国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」鞍橋金具の復元について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第1号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 62-76
- 2005 「日向・大隅・薩摩地域における渡来人の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会実行委員会 pp. 98-105
- 福尾正彦 1980 「日向中央部における地下式横穴とその社会」『古文化談叢』第7集 九州古文化研究会
- 藤井大祐 2003 「九州南部鉄鏃集成」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会 pp. 251-300
- 2006 「古墳時代南九州における副葬鏃の組成と分布」『鹿児島県考古学会秋季大会研究発表会』資料 鹿児島県考古学会 pp. 8-9
- 2007 「九州南部の中期古墳」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会 pp. 139-159
- 2009 「古墳時代薩摩地域における石棺墓の展開と特質—板石積石棺墓を中心に—」『薩摩加世田 奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp. 63-80
- 藤田和尊 1988 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集』8 吉川弘文館 pp. 425-527
- 藤原 哲 2013 「古墳時代中期における軍事組織の一側面—島内地下式横穴墓群の分析を中心に—」『日本考古学』36 日本考古学協会 pp. 15-36
- 古谷 毅 2012 「島内地下式横穴墓群出土武器武具の資料的意義—保存状態と武器武具の性格—」『シンポジウム「島内地下式横穴墓群出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委員会 pp. 9-14
- 北郷泰道 1980 「地下式横穴墓出土の胡籙金具」『宮崎考古』第6号
- 1981 「地下式横穴墓出土の胡籙金具—補遺—」『宮崎考古』第7号
- 1986 「南境の民の墓制」『えとのす』第31号 新日本教育図書株式会社 pp. 108-122
- 1994 「武装した女性たち—古墳時代の軍事編成についての覚書—」『考古学研究』40-4 pp. 133-141
- 1994 『熊襲・隼人の原像—古代日向の陰影—』吉川弘文館 pp. 261
- 2006 「再論—南境の民の墓制—地下式横穴墓研究の現在—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第2号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 1-12
- 前坂尚志 1994 「蛇行剣小考」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』同シリーズ刊行会 pp. 313-330
- 松田 度 2001 「本目遺跡 SK17・18の検討—地下式板石積石室墓にみる地域文化のあり方—」『本目第3次～5次発掘調査報告』免田町教育委員会 pp. 135-158
- 水野敏典 2003 「古墳時代中期の武器・武具にみる交流の諸相と斉一性」『古代近畿と物流の考古学』学生社 pp. 139-147
- 宮代栄一 1995 「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』第70号 九州考古学会 pp. 19-43
- 1997 「鹿児島県出土の馬具の研究—寺師見国氏の資料を中心に—」『人類史研究』第9号 人類史研究会 pp. 171-178

- 森山栄一 1982「地下式板石積石室墓出土の鉄器について」『森貞次郎博士古稀記念文化論集』同刊行会 pp. 1135-1147
- 吉村和昭 2004「地下式横穴墓出土の甲冑」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 2005「西都原あるいはえびの市真幸出土の三角板鋌留短甲」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第1号 pp. 8-23
- 2007「甲冑観察の視点」『図録 特別展 巨大古墳の時代—九州南部の中期古墳—』宮崎県立西都原考古博物館 pp. 49-51
- 2008「寛政元年発見「猪塚」地下式横穴墓とその評価」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第4号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 1-16
- 2012「被葬者像の検討」『シンポジウム 島内地下式横穴墓群出土品の評価と被葬者像』予稿集 えびの市教育委員会 pp. 21-26
- 2012「地下式横穴における埋葬原理と女性への武器副葬」『南九州とヤマト王権—日向・大隅の古墳—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 58 pp. 147-155
- 2013「西都市石貫出土の横板鋌留短甲」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第9号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 21-30
- 2013「甲冑を副葬する地下式横穴墓—宮崎平野部と内陸部—」『山之将軍と里之王は 地底の奥津城に眠る』平成25年度特別展 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 44-45
- 2014「小木原1号地下式横穴墓出土短甲の検討—三次元計測技術を活用して—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第10号 宮崎県立西都原考古博物館 pp. 15-32
- 和田理啓 2001「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第I分冊 第4回九州前方後円墳研究会実行委員会 pp. 607-621
- 2002「宮崎の鉄鏃—その分布と流通について—」『考古学ジャーナル』No. 496 ニュー・サイエンス社 pp. 12-14
- 2007「九州における古墳時代中期の鉄鏃」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集 同研究会実行委員会 pp. 59-74

九州南部の古墳時代鉄器文献以外で、本書中に引用するもの。(Ⅲ-4・Ⅳ-1章を除く)

- 魚津知克 2003「曲刃鎌とU字形鋌鋤先—「農具の画期」の再検討—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 pp. 29-48
- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性—長頸鏃出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』第40巻1号 考古学研究会 pp. 61-85
- 川畑 純 2011「衝角付冑の型式学的配列」『日本考古学』第32号 日本考古学協会 pp. 1-30
- 鈴木一有 2012「七観古墳1913年出土遺物の歴史的位罫」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集 国立歴史民俗博物館 pp. 315-343
- 滝沢 誠 1991「鋌留甲冑の編年」『考古学雑誌』第76巻3号 日本考古学会 pp. 16-61
- 中野和浩 2001「島内地下式横穴墓群の沿革」『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財踏査報告書第29集 えびの市教育委員会 pp. 4-10
- 橋本達也 1995「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義—眉庇付冑を中心として—」『考古学雑誌』第80巻第4号 pp. 1-33
- 2012「古墳築造周縁域における境界形成—南限社会と国家形成—」『考古学研究』第58巻第4号 考古学研究会 pp. 17-31
- 2014「中期甲冑の表示する同質性と差異性—変形板短甲の意義—」『七観古墳の研究』京都大学大学院文学研究科 pp. 251-272
- 古谷 毅 2012「鍛造製品の製作工程・技術・技法とその名称」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集 国立歴史民俗博物館 pp. 73-82
- 水野敏典 1995「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版部 pp. 424-441
- 村井崑雄 1973「衝角付冑の系譜」『東京国立博物館紀要』第9号 東京国立博物館 pp. 67-216

Ⅲ. 肝属郡肝付町北後田地下式横穴墓群とその評価

1. 北後田地下式横穴墓群出土資料の紹介にあたって

最南端の古墳築造地域である鹿児島県大隅地域では、古墳出土の副葬品は少なく、なかでも型式学的研究やセット関係などの検討を行い得るものは、曾於郡大崎町神領 10 号墳にあるが、ほかには神領 6 号墳でわずかな資料が、鹿屋市串良町岡崎 15 号墳で断片的な資料が知られる程度である。また、地下式横穴墓では近年調査がなされ、現状では未報告の立小野堀地下式横穴墓群で数多くの鉄器を中心とする副葬品が出土したが、総じてこの地域の地下式横穴墓では副葬品量は少なく、型式学的検討やセット関係まで検討できるものは少ない。そのような中であって、肝属郡肝付町北後田 1 号地下式横穴墓は、ひととき豊富な副葬品をもつ墓として注目できるものである。

鉄剣・U 字形鋤鋤先・鉄斧・鑷子状鉄製品を中心とする副葬品組成は、大隅地域の地下式横穴墓としてはもっとも豊富な内容をもつ岡崎 18 号墳 1 号地下式横穴墓との高い共通性を示しており、上位階層の被葬者を推測せしめる内容である。

しかしながら、さまざまな経緯があって、これまでこの地下式横穴墓群に関しては、1991 年の発掘調査以降、『高山郷土誌』で部分的な紹介がなされた以外には情報がないまま、出土遺物についてもほとんど公開されたことはなく、その意義について十分な検討がなされてこなかった。

今回、ここでは基礎的な整理から行い、資料情報を明らかにした上で、若干の検討を行った。なお、調査時の情報に関しては『高山郷土誌』を再録し、あわせて新たに写真を加えた。再録にあたっては、誤植の修正、漢数字をアラビア数字にあらため一部読点を補うなどしているが、基本的には原文のままである。

本資料紹介にあたっては、肝付町教育委員会のご理解・ご協力を得た。また、調査担当者・中村耕治氏から多くの御教示を得た。記して謝意を表したい。

(橋本)

2. 再録「北後田古墳群」『高山郷土誌』

高山郷土誌編さん委員会編 1997 年

中村耕治

北後田古墳群（検見崎古墳群）

後田稲村・検見崎にある古墳群。肝属川の支流境川に西面する標高約 10～30 m の台地上にある。円墳 4 基が知られていたが、詳細は不明である。平成 3 年、有馬氏の養豚場脇の荒地を整地している際に地下式横穴墓 2 基が発見され、町教育委員会により調査が行われた。調査は鹿児島県教育委員会文化課の協力により 5 月 20 日～24 日まで実施し、文化課主査中村耕治・文化課文化財研究員中村和美が調査を担当した。

1 号地下式横穴（図 12）は、竪穴部および玄室のほとんどが損壊を受けており、全容は明らかではないが、玄室が長方形家形のプランで古式のタイプと思われる。残存しているのは玄室の一部で、幅 150 cm・推定高 1 m で、軽石製組合石棺を有する。副葬品は豊富で長さ 95 cm の鉄剣（鞘金具）・刀子・鉄斧・鋤先・鉄鏟（10）・鑷子がある。人骨は、割合よく残っていたが保存状態は良くなかった。また、石棺の横に他の石棺のものと思われる軽石板が散乱しており、保存状態の非常に悪い人骨と折れた状態の刀子が検出された。これは、追葬が想定されるもので、軽石製組合石棺を有する地下式横穴としては珍しい事例である。

2号地下式横穴（図13）は、玄室の一部が破損して人骨が見つかったものである。玄室は幅1m・長さ2m・高さ60cmの家形で、羨道部は土塊により閉塞される。また、羨道部の取り付けは平入りで新しいタイプのもと思われる。副葬品は無く、人骨はほぼ全身が残っているが保存状態はあまり良くない。

人骨については鹿児島大学歯学部の小片丘彦教授・佐熊正史氏・峰和治氏・竹中正巳氏らにより実測・取り上げおよび分析をしていただいた。また、その報告は竹中氏が中心になって行ってくださった。

人骨の所見については竹中氏の了解を得て掲載した。

1号地下式横穴A人骨（図27-6・28-1・4・5） 熟年男性で、特殊な所見として、下顎右切歯と犬歯の間の歯槽骨中にそれぞれ全長3～4mmの歯の形をした硬組織が4個見られる。これは良性の歯原性腫瘍で集合性歯牙腫であると考えられる。

1号地下式横穴B人骨（図28-3） 保存状態は非常に悪く、頭蓋破片と歯が残るだけである。歯の咬耗から見て壮年、性別は不明。1号A人骨との関係は、現在のところ不明である。

2号地下式横穴人骨（図27-7・28-2・6・7） 若年（15～17才）女性で、四肢骨はきゃしゃである。この人骨については、風習的抜歯が見られる。上顎右第一小白歯が欠如し、上顎左第一小白歯も歯冠を欠き歯根だけが残る。

上顎右第一小白歯相当の歯槽は完全に閉鎖し、この部位は鞍状の稜を形成している。欠如間隙は一歯相当分よりかなり狭い。隣接歯は犬歯がわずかに捻転し、第二小白歯の捻転はみられない。この欠如は、先天性、埋状、外傷、病的脱落とは考えにくく、風習的抜歯による可能性が強い。

上顎左第一小白歯の歯冠欠如の原因としては、齲蝕による歯冠の崩壊が第一に考えられる。しかし、歯根が二根で両根とも頬舌方向に張り出していることから、抜歯が試みられたが、脱臼されず何度も繰り返すうちに歯冠だけが壊れてしまった可能性もある。

古墳時代の風習的抜歯については土肥・田中により（1988）九州大学保管の九州を中心とする西日本古墳時代人骨103例中24例が報告されている。その中には、新富東横間地下式横穴3号人骨

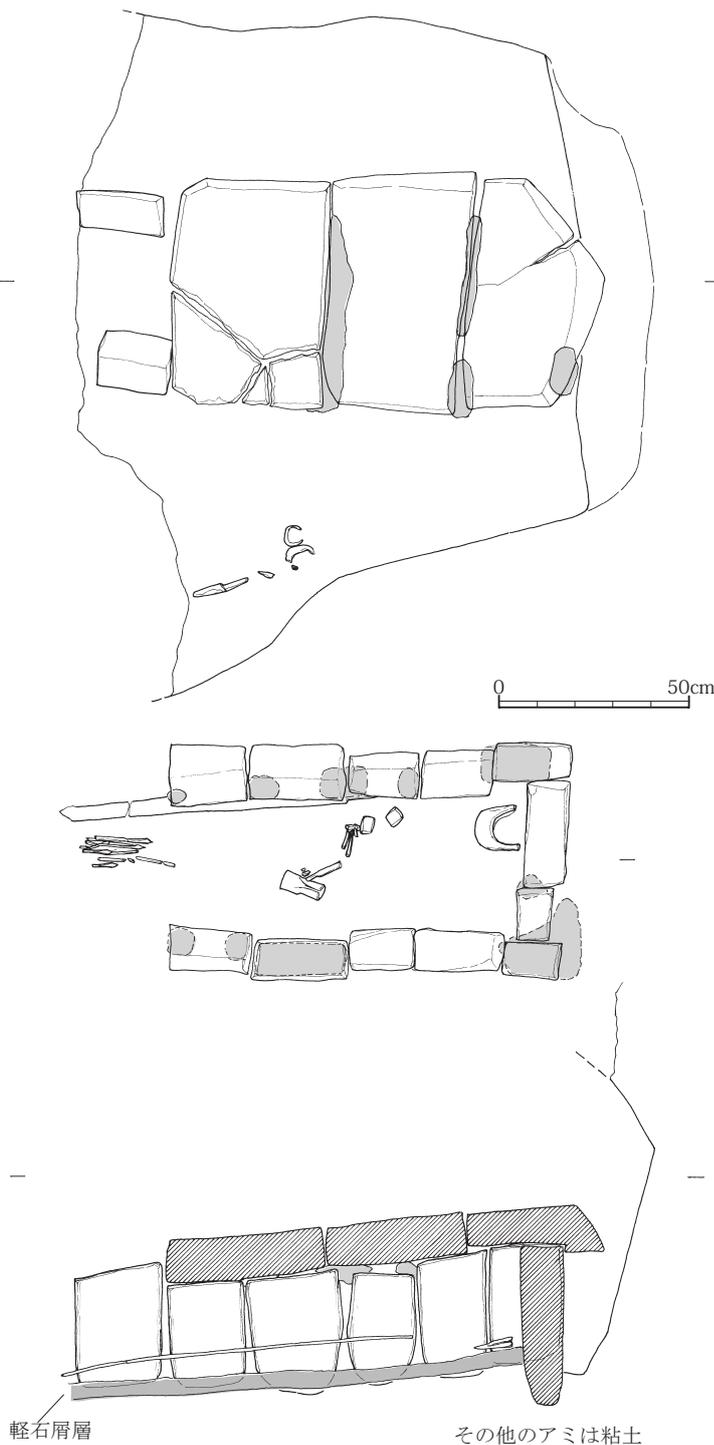


図12 北後田1号地下式横穴墓



図13 北後田2号地下式横穴墓

の例も報告されている。抜歯の意義について、土肥・田中は、中小豪族の家長権相続に伴う服喪抜歯と考えている。本例は若年であり、成人抜歯の可能性もあるが、15才前後になると大人として土肥・田中の言う服喪抜歯と考えても差しつかえない。南九州で抜歯は本例も含めて6例目になる。また、6例中5例が女性であり、6例中5例が高塚墳と共存する地下式横穴から出土している。よって、古墳時代南九州地下式横穴分布域の限られた階層の人々に抜歯風習は存在した可能性が高いと考える。



1号地下式 玄室・石棺（蓋あり）



1号地下式 玄室・石棺内



1号地下式 玄室・石棺内



1号地下式 玄室・石棺内 頭部付近



1号地下式 玄室・石棺内 頭蓋骨



1号地下式 玄室・石棺内 下顎骨付近



1号地下式 玄室・石棺内 遺物出土状況（鉄斧等）



1号地下式 玄室・石棺内 遺物出土状況（鉄鏃）

図14 北後田1号地下式横穴墓調査状況



1号地下式 玄室 (石棺取上げ後・2号人骨)



1号地下式 2号人骨 (玄室内石棺外)



2号地下式 玄室



2号地下式 玄室



2号地下式 人骨出土状況



2号地下式 竖坑



2号地下式 竖坑・閉塞

図 15 北後田 1号・2号地下式横穴墓調査状況

3. 北後田1号地下式横穴墓出土の遺物

三好裕太郎

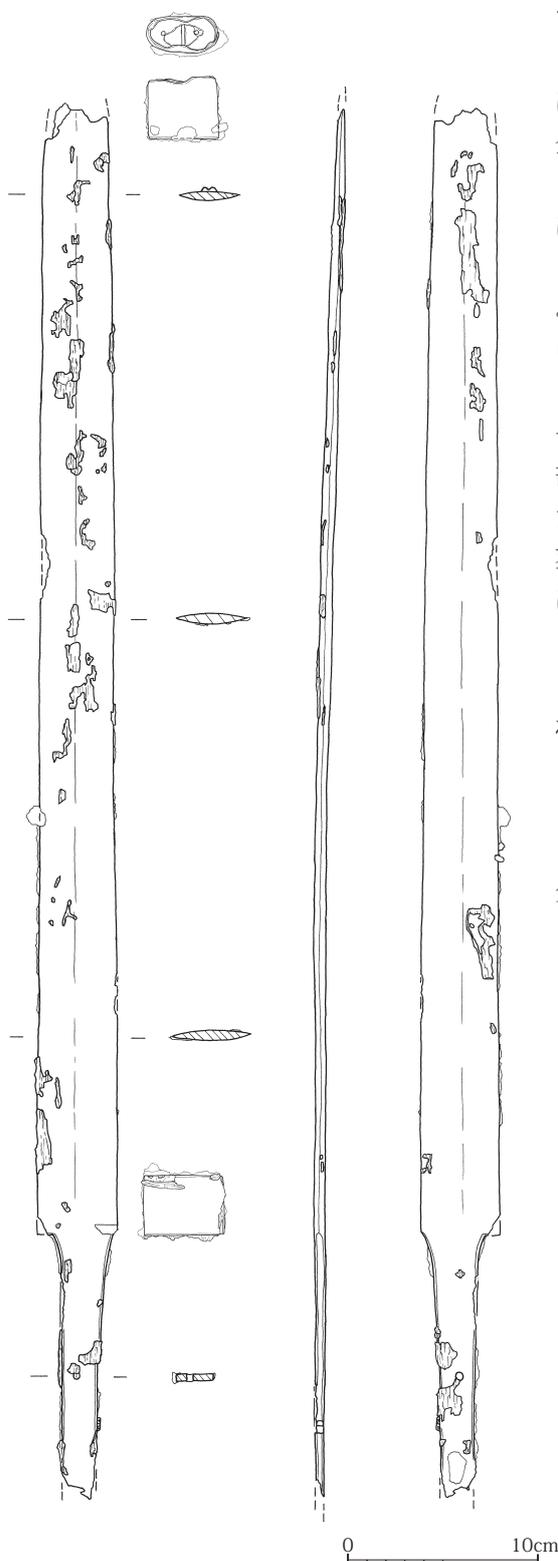


図16 北後田1号地下式横穴墓出土鉄剣

1. 鉄剣 (図16・26-1・2)

ほとんどサビが認められず鉄剣本体の遺存状態は良好であるが、刃部端と茎部端が欠損している。全体に白色の付着物があり、人骨が付着しているものとみられる。現存長は73.6cmであり、刃部は59.7cm、茎部は14.0cm残存する。断面は凸レンズ状に近いが、緩い鑄を作り出しているものとみられる。刃部の最大幅は4.15cmであり、刃部中程で最大幅を測る。関部は左右非対称に作り出され、一方は茎部側に挟りこむ撫関を呈し、もう一方は一部欠損しているが、直角関を呈する。茎部は鉄剣の中心軸からずれており、鉄刀に類似した茎部形状である。目釘孔は1孔のみ認められ、茎部の中心からやや外れた位置に穿たれる。目釘は残存せず、材質不明である。

装具の残存状態はよくない。刃部に木質が付着しており、木製の鞘に納められていたと考えられるが、構造は不明である。刃部と関部との間のサビ膨れが剣身に直行する方向で一直線に生じており、鞘口の端部の位置を反映していると想定できる。関部までの間に5mmほど木質が付着しない部分がみられることから、鞘口にキャップ状に装着

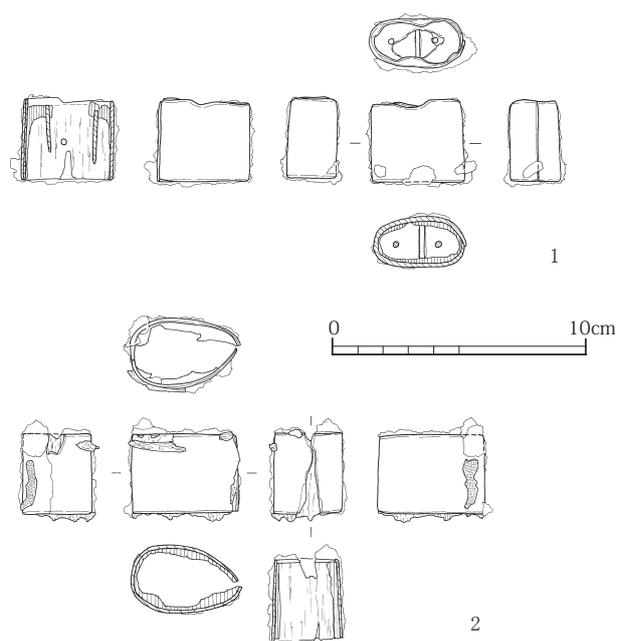


図17 北後田1号地下式横穴墓出土剣装具

する鞘口装具があった可能性がある。茎部には木質が付着し、木製の柄装具が考えられる。また、茎部側面にはわずかに柄巻きの巻紐が残存する(図18)。茎部側面の片側にのみ巻紐が認められることと巻紐と茎部の間に木質などが認められないことから、落とし込み式の柄装具が想定できる。



図18 北後田1号地下式横穴墓出土鉄剣 柄間巻紐

2. 剣装具 (図17・26-3・4)

剣装具1は鞘尻装具である。遺存状態は良く、完形である。全長3.3cmであり、幅は3.65cmである。側面に合わせ目がみられることから、1枚の鉄板を曲げることで成形していることが分かる。鞘尻側では鉄板の内側への折り曲げが認められる。装具断面は厚さ1.5mmで、片面は緩く内側へカーブし、もう一方は直裁的な形状を呈している。

装具の内部には木質が良く残存しており、鞘尻の端部が残存している。鞘尻には蟹目釘が打ち込まれた状態で残存している。蟹目釘は完形のもので全長2.15cm、もう一本は欠損しており残存長1.7cmで、幅はともに1.0mmである。蟹目釘は鞘の内部に残存しているのみで、もともと突出していなかったものと考えられる。また、目釘も鞘尻装具内部に残存している。この目釘は鞘を鞘尻側で固定するものと考えられ、鞘が二枚合わせで作られていたことがわかる。

剣装具2は既報告で鞘装具とされているが、大きさから鑑の可能性がある。本装具は鉄剣の刃部の最大幅より内径が小さく、鞘口装具としては使用できない。出土鉄剣とは別の鉄剣に伴うとは考えられないから、以下では鑑と想定して記述をする。

全長は3.15cm、幅は4.2cmである。1枚の鉄板を曲げることで成形している。断面は厚さ1.0mmで、卵型の形状を呈している。鑑の内部には木質が残存しており、柄に伴うものと考えられる。内部だけでなく、装具の小口側にも木質が付着することから柄の方向が推察できる。装具外面には革と布が付着している。革については共伴している他の遺物に革を用いているものがなく、本来、何に付属していたものかは不明である。布は鑷子状鉄製品に付着しているものと類似しており、これに由来するもので、鑑に伴うものではないだろう。

3. 鉄鎌 (図20・26-5)

鉄鎌は鎌身部の形状から片刃形長頸鎌、柳葉形長頸鎌、圭頭鎌の3型式に分類できる。

(1) 片刃形長頸鎌

図20-1・2・3がこの型式にあたる。鎌身部残存長2.5～2.9cm、頸部長8.25～9.1cm、茎部残存長3.3～4.0cmを測る。鎌身部には腸袂が作り出され、断面は中心に刃が作り出されず、片側に寄ってつくられており、片丸造りと共通した作り方である。頸部断面は長方形を呈し、茎部断面は方形である。茎関はいずれも台形関である。1の頸部には中空構造をした有機質が付着しており、他個体に伴う矢羽であろう(図19)。茎部にははすべて木質が残存しており、3に関しては一部口巻きが認められる。また、1・2には下地巻きがみられ、その後に矢柄根を装着していることがわかる。

(2) 柳葉形長頸鎌

図20-4のみがこの型式にあたる。4は鎌身部の左右両側の刃が欠損し、茎端部にも欠損がみられる。残存長13.0cmであり、鎌身



図19 北後田1号地下式横穴墓出土鉄鎌付着 矢羽根

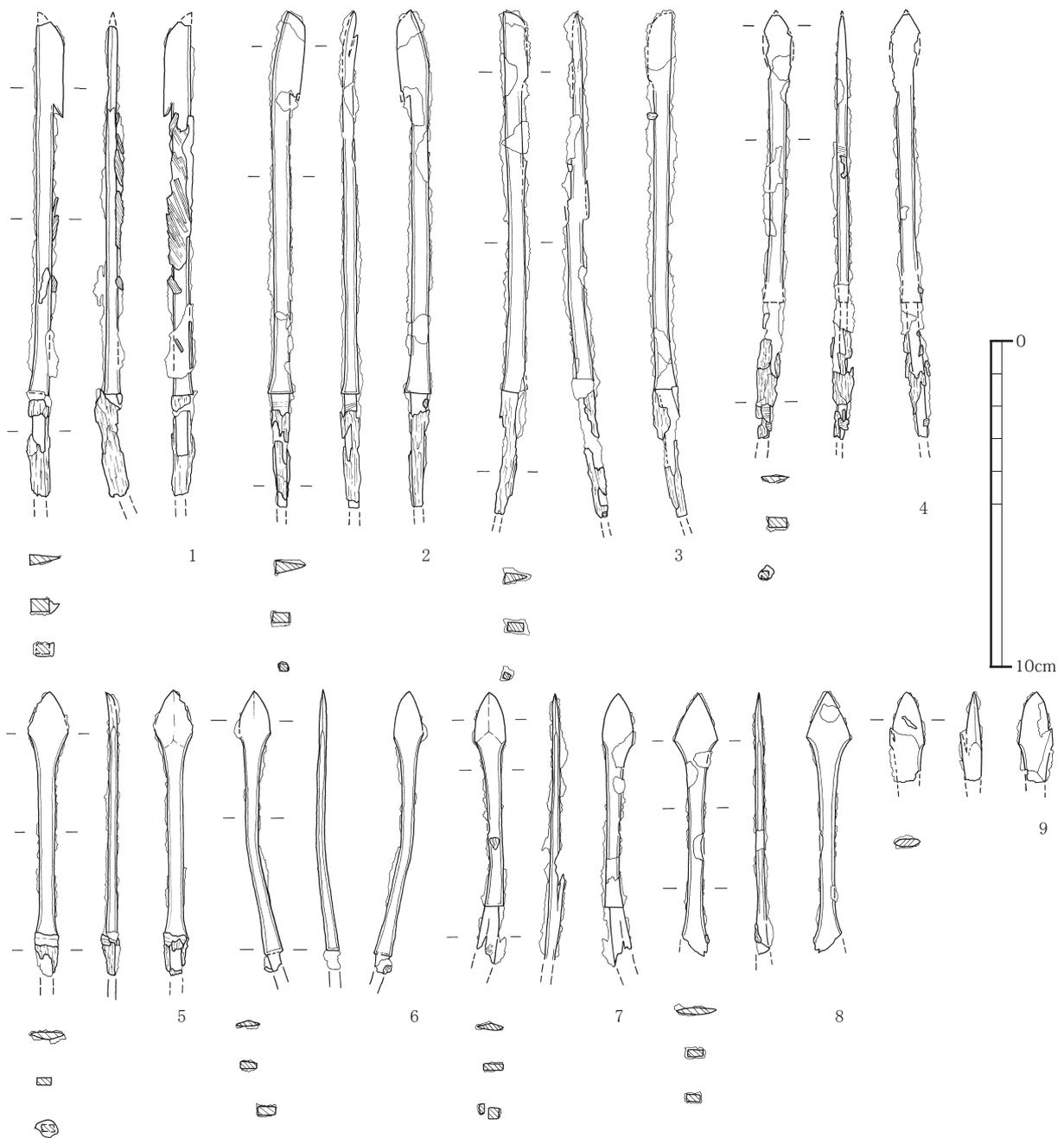


図20 北後田1号地下式横穴墓出土鉄鏃

部長は鏃身部関が欠損しているため不明である。頸部長は6.1 cm以上、茎部残存長は4.6 cmを測る。鏃身部は両刃であり、片丸造りである。頸部断面は長方形、茎部断面は方形である。茎部関はサビと剥離により正確な形状はわからないが、台形と予想される。頸部側面には別個体のものと考えられる木質と、横方向に目地がみられる有機質の痕跡がみられる。茎部には矢柄に伴う木質とその下に下地巻きが観察できる。

(3) 圭頭鏃

図20-5～9がこの型式にあたる。鏃身部長1.3～1.5 cm、頸部長6.1～6.7 cm、茎部残存長0.6～3.5 cmである。6・7の個体は頸部が大きく湾曲している。5・7には鏃身部に鑄を持ち、片鑄造りである。9は鏃身部の破片であるが、両丸造りとみられる。頸部は断面長方形を呈し、幅が約4mmと他の長頸鏃より細い。茎部関は台形関である。有機質は5の茎部に口巻きが残存しているが、下地巻きはみられない。

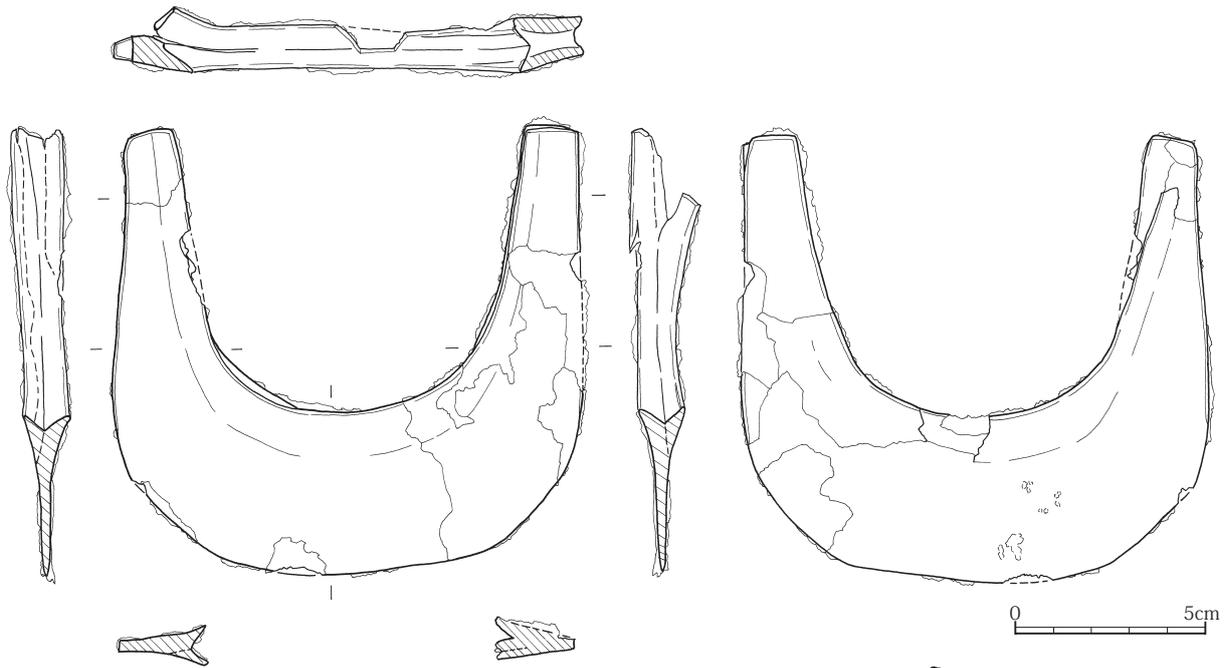


図 21 北後田 1 号地下式横穴墓出土 U 字形鋤鋤先

4. U 字形鋤鋤先 (図 21・26-6・7)

遺存状態は良く、サビはほとんど認められない。裏面右耳部と刃部側の V 字溝に一部欠損がある。鉄の露出している箇所がほとんどであるが、表面では一部で鉄が剥離している。形状は、外縁では耳部から刃先に向かってやや膨らみをみせ、内縁は耳部がやや傾いた U 字形を描く。魚津分類の A3c 類にあたる (魚津 2003)。

全長 11.8cm、基部幅 11.8cm、刃部長 3.5cm、刃部幅 12.0cm である。左耳幅 2.6cm、右耳幅 3.0cm、内割り長 7.4cm、内割り幅 9.25cm である。厚さは刃部で 1.5～2mm と薄く、耳部で 1.0～1.35cm を測る。

V 字溝は耳部端側では 8.0mm、刃部側では 3.0mm と刃部側に向かうにしたがって浅くなる。裏面では鉄板を鍛接して V 字溝を成形していることが観察できる。

有機質はほとんど観察できず、骨と推定される白色の付着物が認められるのみである。V 字溝内部にも木質は確認できず、柄は装着せずに副葬している。

5. 鉄斧 (図 22・27-1・2)

遺存状態は極めて良く、袋部をわずかに欠損するのみである。サビもわずかに認められるのみで、鉄が露出している。肩部は緩やかで張り出さず、刃部へとつながる。全長は 11.0cm、である。刃部最大幅は 4.6cm、刃部厚は袋部との境で 1.4cm を測り、刃部には刃を砥ぎだした際に生じた幅 2mm の面が観察できる。側面は

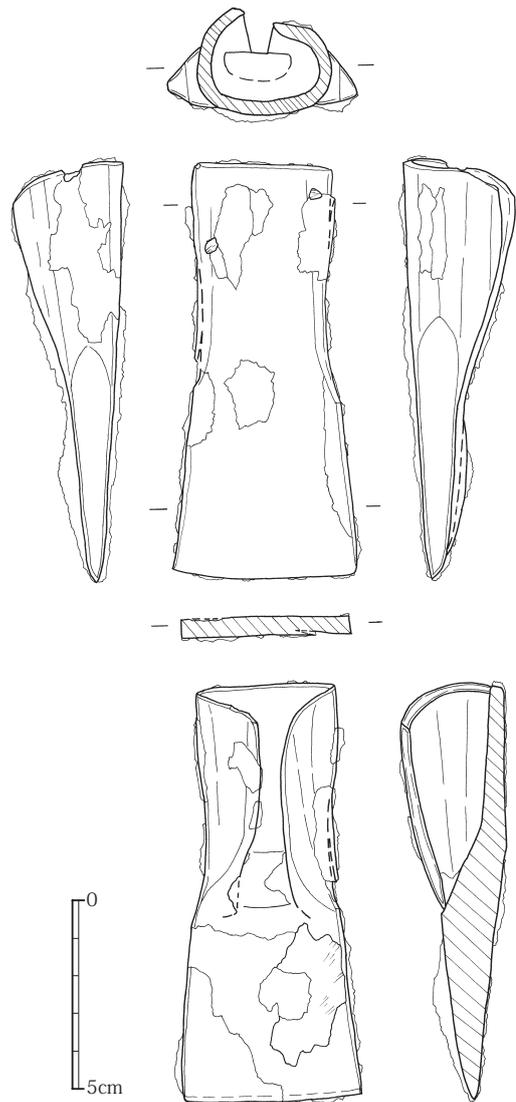


図 22 北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄斧

平坦な面を作り出している。袋部は幅 3.7cm を測り、袋部厚は 4mm である。袋部は断面楕円形を呈しており、表面には折り曲げた痕跡が明瞭な稜として確認できる。付着物はわずかに有機質と想定される繊維状の痕跡がみられるのみである。特に袋部内に木質は観察できず、柄をはずした状態で副葬されたと考えられる。

6. 鑷子状鉄製品 (図 23・24・25・27-3・4)

遺存状態は極めて良好であり、布や木質といった有機質が付着している。鑷子状鉄製品と棒状金具は遊環で連結する。鑷子状鉄製品は全長 11.0cm、頭部幅 9.5mm 側面端部幅 7.0mm、側面端部厚 3.0mm を測る。1本の鉄棒を折り曲げて成形しており、頭部は不整形な円形を呈し、丁寧に整えられてはおらず、かなり簡素な印象を受ける。明瞭な肩部をもち、先端部は尖らず丸みを帯びた形状である。また、先端部にはズレが生じているが、先端部を閉じた状態で副葬していたと考えられる。

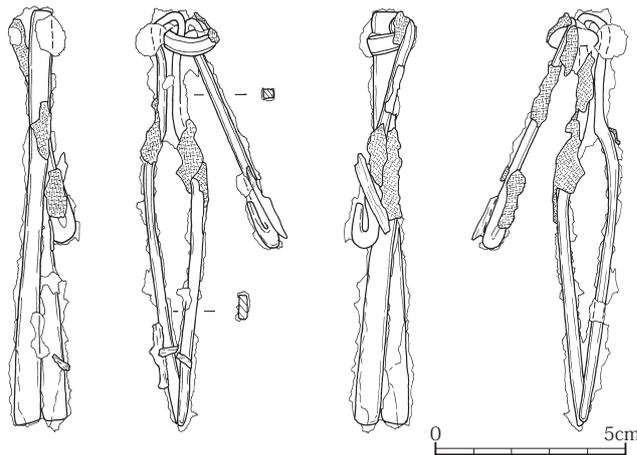


図 23 北後田 1 号地下式横穴墓出土鑷子状鉄製品

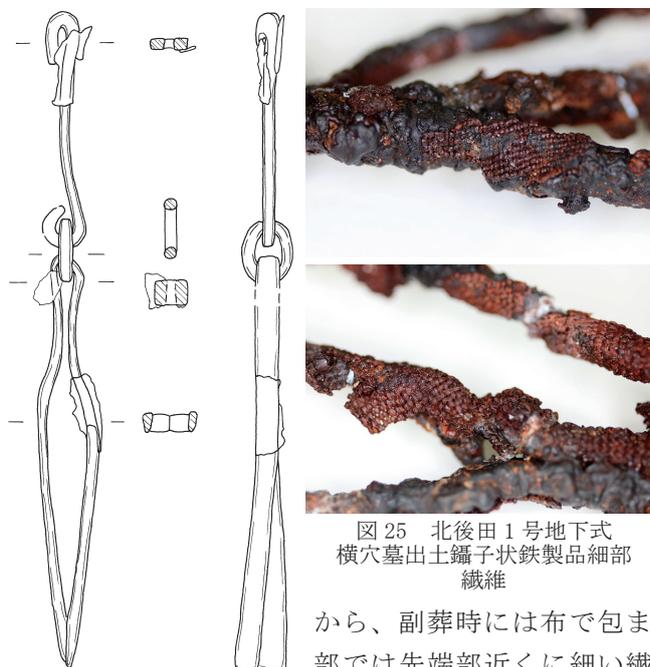


図 24 北後田 1 号地下式横穴墓出土鑷子状鉄製品展開図



図 25 北後田 1 号地下式横穴墓出土鑷子状鉄製品細部繊維

遊環は長さ 1.6cm 幅 1.3cm を測り、楕円形を呈する。断面は円形で厚さは 3.0mm である。1本の鉄棒を曲げて作り出していると考えられるが、接合箇所は判然としない。棒状金具は全長 6.2cm、断面は隅丸方形を示し、厚さ 2.5～3.5mm である。金具の両端を折り曲げることで環を成形しており、一方は遊環と連結する。もう一方は形状も細長い楕円形を呈し、遊環側より径が小さい。先端部が直線的な面を持つことから、環を作り出すというより、端部を鍛打して折り曲げたとみるべきであろう。

以上これら 3つの部品を伸ばした状態で復元すると全長 17.4cm を測る。

有機質では鑷子状鉄製品の上半部に付着する布が非常に良好な状態で観察できる。布は 5mm 四方あたり縦糸と横糸がそれぞれ 5本みられ、平織りであることが分かる。この布は外面巻きつくように付着しているから、副葬時には布で包まれた状態であったと考えられる。一方、下半部では先端部近くに細い繊維状の有機質が認められるとともに、全体的に白色の付着物がみられる。また、棒状金具には先端に木質とみられる有機質が付着している。

有機質では鑷子状鉄製品の上半部に付着する布が非常に良好な状態で観察できる。布は 5mm 四方あたり縦糸と横糸がそれぞれ 5本みられ、平織りであることが分かる。この布は外面巻きつくように付着しているから、副葬時には布で包まれた状態であったと考えられる。一方、下半部では先端部近くに細い繊維状の有機質が認められるとともに、全体的に白色の付着物がみられる。また、棒状金具には先端に木質とみられる有機質が付着している。

有機質では鑷子状鉄製品の上半部に付着する布が非常に良好な状態で観察できる。布は 5mm 四方あたり縦糸と横糸がそれぞれ 5本みられ、平織りであることが分かる。この布は外面巻きつくように付着しているから、副葬時には布で包まれた状態であったと考えられる。一方、下半部では先端部近くに細い繊維状の有機質が認められるとともに、全体的に白色の付着物がみられる。また、棒状金具には先端に木質とみられる有機質が付着している。

有機質では鑷子状鉄製品の上半部に付着する布が非常に良好な状態で観察できる。布は 5mm 四方あたり縦糸と横糸がそれぞれ 5本みられ、平織りであることが分かる。この布は外面巻きつくように付着しているから、副葬時には布で包まれた状態であったと考えられる。一方、下半部では先端部近くに細い繊維状の有機質が認められるとともに、全体的に白色の付着物がみられる。また、棒状金具には先端に木質とみられる有機質が付着している。

7. 刀子 (図 27-5)

既報告には、石棺内 A 人骨、石棺外 B 人骨それぞれに伴う刀子の出土記録があるが、今回の検討の際に、その本体は確認できなかった。図 27-5 は刀子の鍔とみられる装具であり、外面には繊維が付着する。どちらの刀子に伴うものかは分からない。



1. 鉄剣 2. 同左拡大 3. 剣装具 4. 同左展開
5. 鉄鍬 6. U字形鉄鋤先 7. 同左背面

图 26 北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄器 (1)



1. 鉄斧 2. 同左背面 3. 鑷子状鉄製品 4. 同左背面 5. 刀子鏹
6. 1号地下式A人骨 7. 2号地下式人骨

图 27 北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄器 (2)・北後田地下式横穴墓群出土人骨 (1)



1・4・5.
1号地下式A人骨

2・6・7.
2号地下式人骨

3.
1号地下式B人骨

图 28 北後田地下式横穴墓群出土人骨 (2)

4. 北後田1号地下式横穴墓出土鉄器の製作技術と年代

三好裕太郎

はじめに

北後田1号地下式横穴墓は鉄器の遺存状態が極めて良く、鉄斧やU字形鍬鋤先など、ほとんどサビの認められない遺物が出土した。この地下式横穴墓では土器などで時期を推し量ることのできる資料がなく、鉄器をもとに時期比定をおこなう必要がある。また、その遺存状態の良さから他ではみられないような製作技法をうかがうことのできるものもある。ここでは、今回報告したU字形鍬鋤先と鞆尻装具について製作技法とその年代に関する検討をおこなう。

1. 副葬遺物の製作技法

(1) U字形鍬鋤先の製作技法

U字形鍬鋤先の製作技法はこれまでもいくつかの技法が指摘されてきた。まずはその研究史を概観する。

U字形鍬鋤先の製作技法について初めて論じたのは白木原和美で、氏はこの鍬鋤先を鉄板を折り曲げてつくるのみの幼稚な製作技法であるとした(白木原1960)。松本正信は近世鍬鋤先の製作技法をもとに、製作技法の復元をおこなった(松本1969)。松本は凸字形の鉄板にV字溝を鑿で彫り、全体を鍛打整形・U字形に折り曲げをおこない、鍛打によって潰れた溝を再び彫り直すことで作られているとした。中村光司は、鉄板を折り曲げることでV字溝を作り出した後にU字形に湾曲させ、最終的に鍛打するという「鉄板折り曲げ鍛接技法」による作成を指摘した(中村1995)(図29)。古瀬清秀、松井和幸はこれに対し、鉄板を折り曲げ後に鍛接した際にできる接合痕にそって鑿でV字溝を彫るとした(古瀬1991、松井2001)。近年では、橋本達也が岡崎18号墳1号地下式横穴墓出土のU字形鍬鋤先の観察をもとに、鉄板を2枚重ね、鍛接することで製作しているとし(橋本2008a)、河野正訓はU字形鍬鋤先の断面の観察から、古瀬の指摘した製作技法のように沸かし付けによるU字形鍬鋤先の製作がおこなわれたとした(河野2012)。

このようにU字形鍬鋤先の製作技法については様々な議論があり、諸説存在する。それはこの鍬鋤先に多様な製作技法が用いられた可能性があること、列島出土の事例の多くがサビに覆われており、製作技法を観察し難いものが多いことに要因があるだろう。

北後田1号地下式横穴墓で出土したU字形鍬鋤先は幸いにもサビがほとんど認められず、極めて遺存状態の良いものであった。そのため、製作技法が明瞭に観察できる箇所が存在する。ここで、その製作技法について検討する。

このU字形鍬鋤先にはV字溝と刃部の間に鍛接痕が認められる。この鍛接痕は両面にはなく、片面のみに観察できる。すなわちV字溝の成形は鑿彫りでおこなっているわけではなく、溝部を貼付けによって成形していたこと分かる。製作技法を復元すると、①1枚の鉄板をU字形に鍛打・

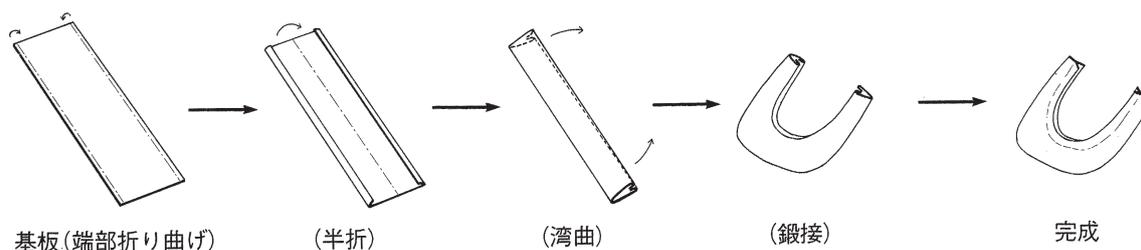


図29 中村光司によるU字形鍬鋤先の製作技法

整形。② U字に湾曲させた内側の端部を「く」の字状に折り曲げる。③ 別に「く」の字状に折り曲げた鉄板を、U字に湾曲させた②の鉄板に乗せ、鍛接する⁽¹⁾ (図30)。以上のような工程を踏むことでV字溝を作り出しているとみられる。V字溝を作り出す際の鉄板の折り曲げは鍛接の前後のどちらでおこなわれたかは正確には不明である。

鑿での溝部成形でなく、別の鉄板を貼り付けるという特徴から「溝部貼付け技法」ということができよう。同じ技法が想定されるU字形鉄鋤先として、岡崎18号墳1号地下式横穴墓出土U字形鉄鋤先をあげることができる(橋本2008a)。

もちろん、この技法は研究史上で指摘されてきた技法を否定するものではない。本資料と類例がともに九州南部の出土であることから、地域性を示す技法である可能性も残る。

(2) 鞆尻装具の製作技法

鞆尻装具は特徴的な製作技法がみられる。金属製の鞆装具は主に古墳時代後期に普及する遺物で、この鞆尻装具は鉄製で蟹目釘が用いられるなど、とくに後期の新しい特徴がみられる。その製作技法は、①鉄板を筒状に巻き、鍛接する。②鞆尻側の中心を内側に折り曲げる。③鞆木に鉄製の目釘をうち、固定する。④鞆尻装具を鞆にはめ込み、蟹目釘をうつ。といった工程で製作していると推測される。鞆尻装具を筒状に成形する際に鍛接の痕が段として残ることと、筒の端部を折り曲げるのみで鞆木を止めることから、裝飾付太刀などに用いられるものより、稚拙な印象を受ける。

鉄製で裝飾が施されておらず、鞆尻側の端部を折り曲げるだけの簡素な加工を考慮すれば、九州南部での在地生産品である可能性がある。

2. 出土遺物の年代

北後田1号地下式横穴墓で出土した遺物の中で、時期を明らかにできる資料はやはり鉄鏃であろう。ここでは片刃形長頸鏃、柳葉形長頸鏃、圭頭鏃の3型式の鉄鏃が存在する。

長頸鏃は古墳時代中期中葉頃に出現し、その後長く用いられ続ける型式である。とくに刃部につくり出される腸袂は、時期が下るにつれて浅くなることが指摘されている(水野2009)。また、茎関は直角関から台形関、棘関へと変化することが知られている(水野2003)。北後田1号地下式横穴墓で出土した長頸鏃の腸袂は、深いものでも4mm、浅いものでは2mmと総じて浅く、古墳時代後期に下るものとみられる。また、茎関は明瞭な台形関を呈しており、水野敏典の分類での台形関bに相当する。これらの特徴から、古墳時代後期前葉に位置づけるのが妥当であろう。

圭頭鏃は九州の地域性を示す型式の鉄鏃として早くから指摘されてきた(高木1981)。今回出土した圭頭鏃の特徴は、鏃身部が片鑄造りのものがみられること、6cmほどの頸部をつくり出し

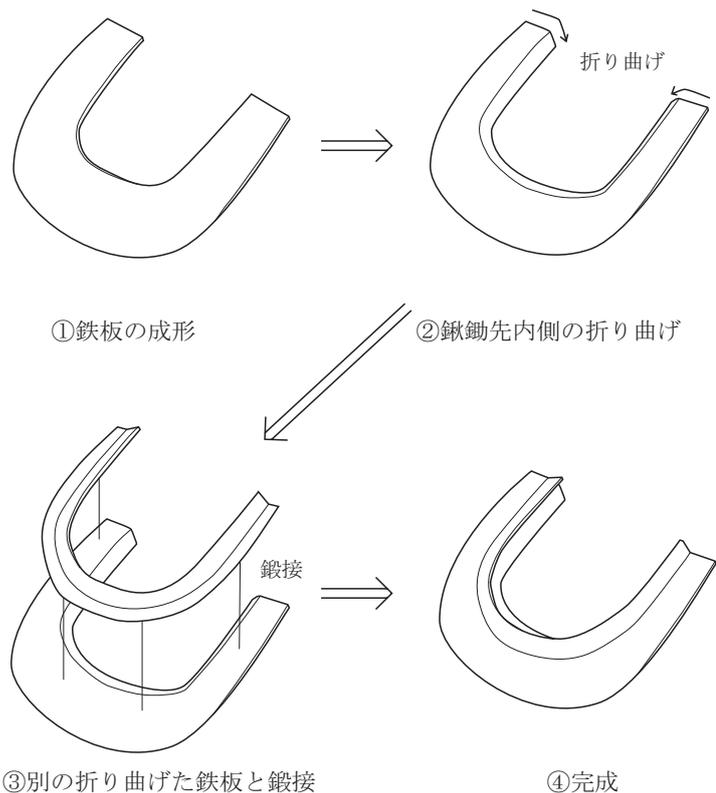


図30 U字形鉄鋤先の製作工程

ていることの2点が挙げられる。明瞭な頸部のつくり出しは長頸鏃の影響を受けて成立しているものと考えられる。大隅地域では祓川21号地下式横穴墓に類例がみられる。これも、長頸鏃と齧齧をきたすような年代ではなく、古墳時代後期前葉といえよう⁽²⁾。

こうした鉄鏃からの年代比定に対して、問題となるのは鞆尻装具である。この装具は蟹目釘を使用しており、装飾付大刀にも通じるものである。蟹目釘をもつ鞆尻装具は古墳時代後期初頭では大阪府峯ヶ塚古墳で銀装の鞆尻装具が出土している。一方でこの種の鞆尻装具が普及するのは後期後半以降である。そのため鞆尻装具が普及する後期後半のものとも考えることも可能である。しかし、本地下式横穴墓のように簡素なつくりのものは在地生産品の可能性があり、同様の鞆尻装具の類例はないことから、この遺物の時期比定については類例の増加を待ちたい。

以上のことから、北後田1号地下式横穴墓の時期は鉄鏃の年代観によって、古墳時代後期前葉、MT15～TK10型式段階、6世紀前葉のうちで捉えられる。

まとめ

本稿では、北後田1号地下式横穴墓の副葬品のうちU字形鍬鋤先と鞆尻装具について製作技法の検討をおこなった。また、時期の決定に関しては鞆尻装具の年代に課題が残るものの、主に鉄鏃の年代観から古墳時代後期前葉(MT15～TK10型式段階)に位置づけられるとした。

製作技法の検討からは、とくにU字形鍬鋤先という研究史上多くの技法が提示された遺物で、貼付けによるV字溝の成形をおこなっていることがわかった。他の出土遺物にも遺存状態の良好なものが多いが、それらに関する検討は今回十分ではない。今後の課題としたい。

註

- (1) この時、鍛接する鉄板はV字溝を作るためのもので、刃部とは数cmほどの幅でしか鍛接しない。
- (2) 薩摩・大隅半島地域では、TK43期以降長頸鏃がみられなくなることが指摘されている(橋本2008b)。このことは北後田1号地下式横穴墓の年代が古墳時代後期前葉になることと整合的である。

参考文献

- 河野正訓 2012「鉄鏃(U字形刃先)の構造」『古代学研究所紀要』第16号 明治大学古代学研究所 pp. 37-51
- 白木原和美 1960「クワやスキについての研究ノート」『歴史評論』118 民主主義科学者協会歴史部会 pp. 2-12
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『樞原考古学研究所論集』第8号 吉川弘文堂 pp. 529-644
- 鈴木一有 2002「九州における古墳時代の鉄鏃」『考古学ジャーナル』No. 496 ニューサイエンス社 pp. 8-11
- 中村光司 1995「U字形鍬鋤先の製作技法」『西岡古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財報告 115-5 三重県埋蔵文化財センター pp. 27-29
- 高木恭二 1981「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集 城二号墳発掘調査団 熊本県宇土市教育委員会 pp. 44-71
- 橋本達也 2008a「岡崎18号墳出土鉄製品と肝属平野周辺域をめぐる広域交流」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp. 269-276
- 橋本達也 2008b「九州における古墳時代後期の甲冑と鉄鏃」『後期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会 pp. 39-60
- 古瀬清秀 1991「農工具」『古墳時代の研究8 古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣 pp. 71-91
- 松井和幸 2001「古代の鉄製鍬先と鋤先」『日本古代の鉄文化』雄山閣 pp. 74-102
- 松本正信 1969「U字形鍬(鋤)先論」『考古学研究』第15巻第4号 考古学研究会 pp. 42-47
- 水野敏典 2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『シンポジウム 後期古墳の諸段階』東北・関東

5. 岡崎 18 号墳 1 号地下式横穴墓と北後田 1 号地下式横穴墓出土遺物の比較

上にみてきたように、北後田 1 号地下式横穴墓では豊富な副葬鉄器が出土した。あらためてその器種構成をみると、近在する鹿屋市串良町岡崎 18 号墳 1 号地下式横穴墓（以下、岡崎 18-1 号地下式）の副葬品組成にきわめて良くにていることに気づかされる。

岡崎 18-1 号地下式は、現状で、肝属平野周辺域の地下式横穴墓のなかではもっとも豊富な副葬品をもつものであり、その内容も 3 本の鉄剣のほか、鉄鋌をはじめとする朝鮮半島系鉄製品を含むこと、さらに古墳の墳丘下に玄室を構築することも含めて、首長墓として理解できるものである。

表 1 を一覧してわかるように、両地下式横穴墓の副葬品は非常に共通性が高い。鉄鋌に関しては、一般的な流通品ではないことともに、北後田 1 号の時期にはほとんどみられないものであるので、時期的な要因も考慮しなければならない。また、鉄鍬の有無は可能性として性差に関連するかも知れない。北後田 1 号地下式 A 人骨は熟年男性であるので鉄鍬を保有するに相応しいが、岡崎 18-1 号で鉄鍬が出土していないのは、この墓が女性被葬者の可能性を否定しないものである。これらを考慮すると、両者の基本的な副葬品には共通する選択性が働いているのは明らかである。

また、素材は花崗岩と軽石というように異なるものの、ともに地下式横穴墓のなかでも限定された被葬者だけが採用する石棺に埋葬されている。花崗岩は初期の一部にしか採用されなかったもので、この差も時期差の反映であって、性格的には共通するものである。

北後田 1 号地下式は、墳丘などは確認されていないが、岡崎 18-1 号地下式との対比において、その副葬品内容からみて、現状では古墳時代後期前葉のこの地域でもっとも地位の高い人物を想定しなければならない。

一方、そもそもこの地域では併行する古墳時代後期の古墳の存在は確認されていない。そこに、古墳社会の中でも境界領域としての質的な差が生じはじめていた可能性が考えられる（橋本 2012, pp. 23-24）。すなわち、北後田 1 号地下式では、中期首長墓的な副葬品を組成を継承しつつ、しかし古墳社会からは異質化をはじめた、この地域の転換期に生きた被葬者の姿が浮かび上がるだろう。

(橋本)

表 1 岡崎 18 号地下式横穴墓と北後田 1 号地下式横穴墓の比較

	鉄剣	鉄斧	鑿子	U 字形鍬鋤先	刀子	鉄鋌	鉄鍬	石棺
岡崎 18 号墳 1 号地下式	③	○	○	○	○	○		○花崗岩
北後田 1 号地下式	○	○	○	○	○?		○	○軽石

IV. えびの市島内地下式横穴墓群の鉄器とその評価

1. 島内地下式横穴墓群の鉄器とその評価

『シンポジウム「島内地下式横穴墓群の出土品の評価と被葬者像」予稿集』えびの市教育委員会 2012
改訂再録

橋本達也

1. はじめに—島内の“地下式横穴墓”—

島内地下式横穴墓群、この遺跡の特徴はなんといっても、その名前にある地下式横穴墓という古墳時代の墓が群集して造営されていること、かつそこに古墳時代のきわめて優れた副葬品が大量に収められていること、そして環境に恵まれて非常に良好な状態で保存されていることであろう。

地下式横穴墓は地表面から下向きに竪坑と呼ぶ穴を掘り、その竪坑の下部から横向きに墓室を掘り込んでつくるものである。その分布の北東端は児湯郡高鍋町下耳切第3遺跡、北西端は人吉市天道ヶ尾遺跡、南端は鹿屋市吾平町中尾地下式横穴墓群、西端は伊佐市大口盆地西部の諏訪野地下式横穴墓群などであり、九州南部に独自の展開をしている。なかでも、都城からえびのに掛けての宮崎県西部盆地地域に集中し、その数はすでに知られているものだけで1000基を超え、在地墓制として定着している。

九州南部に特有、そして在地墓制ということから、古墳研究史の中では文献史料に現れる大隅・薩摩の住人で7世紀後葉以降は朝廷に対して朝貢や服属儀礼を行い、また8世紀前葉には抵抗して内乱も引き起こした“隼人”の墓であるという説明が広くなされてきた。近年でもまだ地下式横穴墓＝隼人の墓といった言説をみかけることはあるが、そこには多くの問題がある。

隼人は7世紀後葉、天武朝以降の政治制度によって異民族として括られるようになったもので、この地域の文化や民族でないことは、すでに中村明蔵や永山修一などの文献史学者が明らかにしている。また、隼人の居住域は大隅・薩摩の二国であって、日向国は含まない。

地下式横穴墓の出現は古墳時代中期前葉、5世紀前葉までさかのぼり、またその終焉は7世紀前葉である。そしてその分布は日向国域に広く分布し、また薩摩国域には及ばない。時間・空間とも隼人と地下式横穴墓は相容れないのである。このような地下式横穴墓＝隼人の墓といった歴史認識が生まれたのは1960年代～1970年代で、今日では見直す必要がある。

では、地下式横穴墓とはなにか。その一形態、土壙系地下式横穴墓は在地で弥生後期以降の伝統をもつ木蓋土壙墓に系譜的淵源をもつとみられるが（津曲2011）、主流形式の家形系地下式横穴墓は、その出現が5世紀前葉にさかのぼること、横穴墓制であることが重要である。この時期、北部九州では朝鮮半島、百済の地域を経由して横穴墓制の横穴式石室が伝わる。その構造は竪坑状の墓道から横向きに玄室がつくられるものである。出現時期・構造的な類似性からも地下式横穴墓の出現には朝鮮半島を経由する横穴墓制の導入があり、九州南部で独自に生み出されたものとは考えられない。百済から発せられた外的な影響を受け、地域の地質的環境に適応して発展したものが地下式横穴墓なのである（橋本2008）。また、古墳時代中期の九州では地下式横穴墓・横穴式石室以外にも多様な墓制が各地域で採用されており、地下式横穴墓のみが異質な墓制として扱われなければならない理由はない。

さて、上記したように九州南部に地下式横穴墓は1000基以上確認されており、在地に広く定着している。その中で島内地下式横穴墓群では、玄室幅3m以下・長2m以下のものが多い。比較的大型ではあるが、かといって宮崎市下北方5号地下式横穴墓や西都市西都原4号地下式横穴墓の玄室長5m超・幅2m超といった特殊なまでに大型化した飛び抜けて目立つような地下式横穴墓はない。

その一方で、副葬品は非常に豊富である。とくに目立つのが鉄製甲冑である（図31・図32）。島内では古墳時代中期後葉（5世紀後葉）に集中して甲冑が出土する。古墳時代中期の鉄製甲冑は地方様式がなく、その分布の中心は大阪府古市・百舌鳥古墳群に代表される近畿中央部にあることから、その被葬者たちを中心とする中央政権が全国に配布したものと考えられる。すなわち、近畿中央政権との政治的な連携の証として配布されるもので、その背景には実際の軍事行動などにおける貢献があったものと考えられる。また、大型前方後円墳を造営した古市・百舌鳥古墳群の時代は倭の五王の時代でもあり、東アジア的な動乱期でもある。甲冑の副葬はそういった社会状況と密接に結びついていたことがうかがえるのである。

また、114号地下式横穴墓で出土した竜文銀象嵌大刀（図33）は同様に近畿中央政権の中核でつくられ、中央政権との特別な政治関係の中で入手したものであり、おそらく、この保有者が政権内での貢献によ

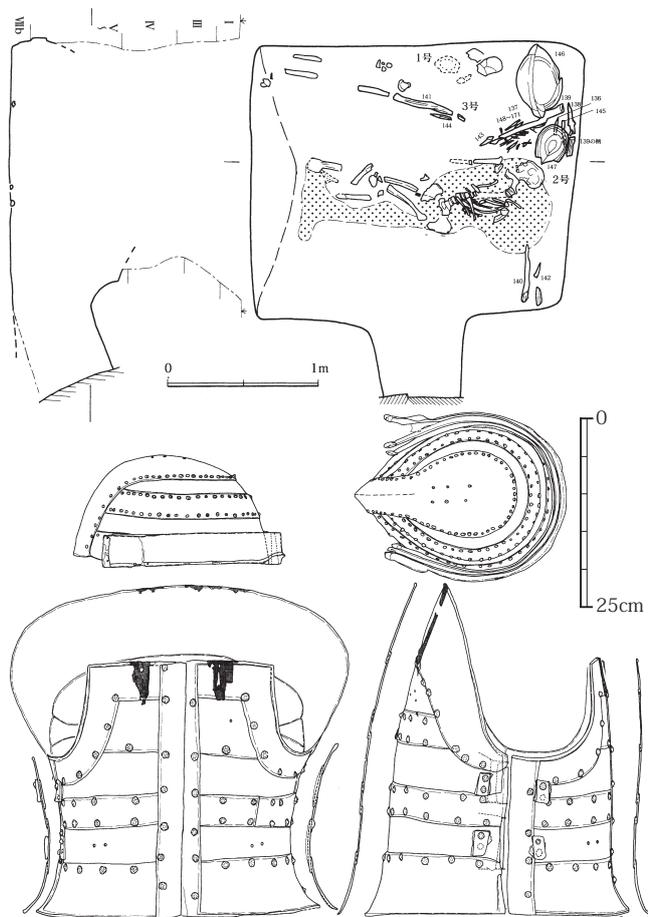


図31 島内21号地下式横穴墓と出土甲冑

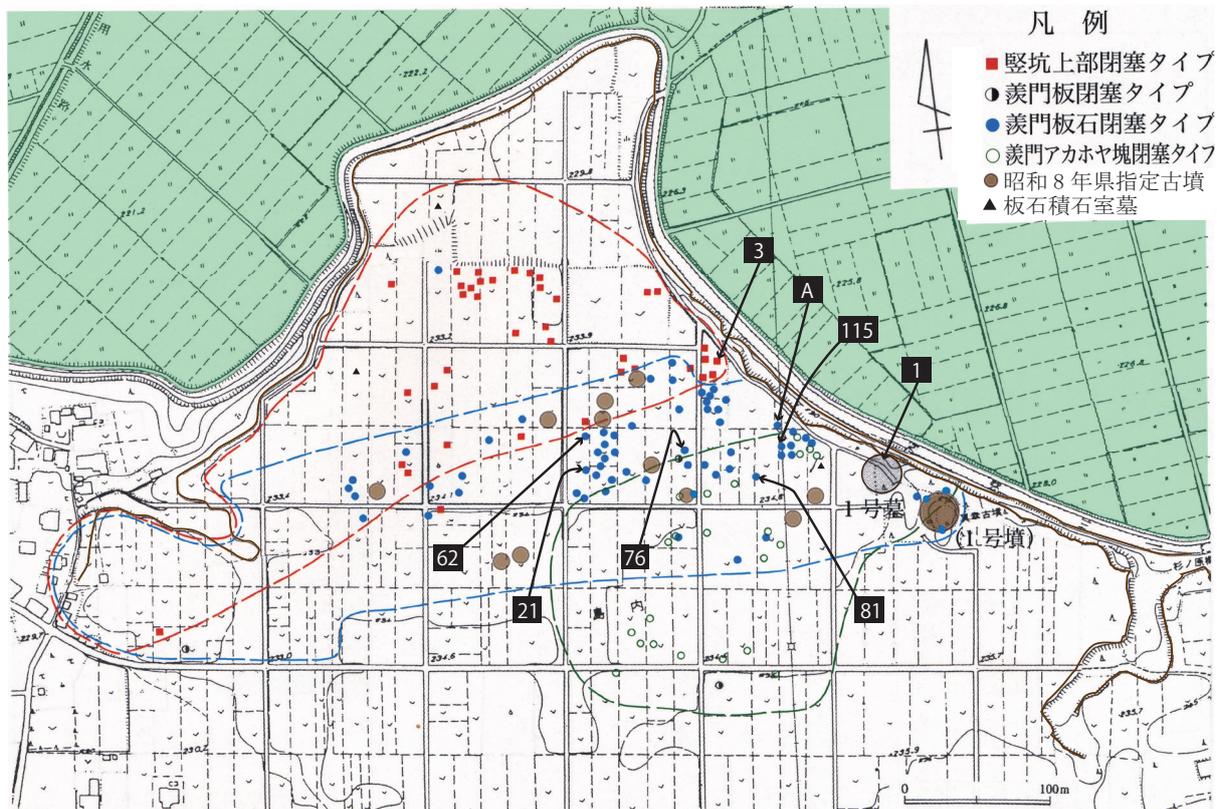


図32 島内地下式横穴墓群の甲冑出土墓（えびの市2010に加筆）



図33 島内114号地下式横穴墓出土龍文銀象嵌大刀

て直接拝領したものであろう。単に在地の有力者として交易などを通じて入手したというようなものとは考えられない。この龍文銀象眼大刀は6世紀前葉に位置づけられ、5世紀後葉以来の関係は続いていたことを表している。

なお、島内地下式横穴墓群での副葬品は遺存環境が非常に恵まれており、通常では遺存しない布や革などの有機物が良好に残る。また鉄はサビが非常に少なく、通常では原形の認識が難しいものが多い古墳出土資料とは異なって、微細な形状や技法まで観察できるものが多い。人骨資料の豊富さも同様の環境と一連のもので、その圧倒的な情報量と存在感から地下式横穴墓の代表例として良く知られている。そのため、地下式横穴墓を良く知らない研究者の中には地下式横穴墓全般で甲冑や鉄器が豊富に出土するものとのイメージされている場合もあるが、これは一般的な事例ではなく、あくまでも地下式横穴墓のなかでも一部に限られた特徴である。

2. 島内地下式横穴墓の副葬品の特質

島内地下式横穴墓を特徴づける副葬品について、いくつか注目できる点を取り上げよう。

まずは、甲冑・刀剣・鏃といった武器・武具が副葬品の中でもきわめて顕著な存在である。そのなかでも、もっとも多いのは鉄鏃である。この時期の主力武器である弓矢の部品であるが、数本程度の出土のものから30本を超えるものまであり、かなり広く採用されている。なかには女性に鉄鏃の伴うことが確認できる事例がある。

鉄鏃と性差 人骨の出土した古墳時代の埋葬施設で女性に鉄鏃が伴う事例があるのは地下式横

穴墓のみにみられる特質である（北郷 1994）（図 34）。

一般に古墳時代の鉄鍬は甲冑とともに男性の所有する器物で、女性に伴うことはない。また、弥生・古墳時代に女性兵士はおらず、女性首長は戦闘指揮などの軍事権をもたなかったことが明らかとなっている（清家 2004）。

地下式横穴墓に鉄鍬をもつ女性がいることに、この地域では女性も軍事に関わったと

する見解があるが（北郷 1994・吉村 2012）、果たしてそうであろうか。この地域では、それほど戦闘や軍事の機会が多かったのであろうか。

甲冑をはじめとする副葬品からみて、地下式横穴墓の被葬者が古墳社会から隔離されていたとは考えられない。一方、宮崎内陸盆地では稲作農耕が十分発展したとは考え難い高燥な地域が多く、そして墓制では首長墓も不明確な複雑化の進んでいない社会だと考えられる。そのようなところで、同時代でここでだけ女性も動員されるような頻繁な戦闘があったとは、にわかに考え難い。

むしろ、このことは武装受容の際の経緯が反映されているのではないだろうか。この地域では古墳時代中期以前に実際の戦闘＝武器が定着しておらず、むしろ鍬が武器としての機能よりも、威儀具や葬送にともなう儀仗などとして重視された可能性を考えたい。武装の社会的意義は定着しておらず、戦闘に関わる文化が未発達な状態で、男性を象徴するものとして分化しなかったのではなかろうか。実際にはこの地域で戦闘が古墳時代中期まで縁遠かったからこそ、武器・武装に関する古墳社会の規範が根付かずに女性への鉄鍬副葬が起こりえたものと考えられる。

鉄器の生産 島内地下式横穴墓群でも鉄鍬はいくつかの形式が組み合わせられて副葬されているが、その代表は圭頭鍬と長頸鍬である（図 35）。圭頭鍬は在地生産であり、長頸鍬は広域流通で入手したと考えるとよいものが多く、近畿中央政権から配布された可能性の高いものを含んでいる。

圭頭鍬は九州南部で独自の発展をしており、なかでもその分布の中心は地下式横穴墓の集中する都城～えびの間にある。比較的技術的難度の高くない圭頭鍬や刀子一部の刀剣類などは、遅くともそれらが顕著に出土するようになる古墳時代中期前葉以降、在地で生産されていたと考えられる（橋本 2003）。

目立つ鹿角製品 在地産鉄器の存在と関連する島内地下式横穴墓の特徴として、鹿角製品の多さが挙げられる。鹿角製品は剣や刀子の装具（図 36-1）として一部にみられるものであるが、島内出土の刀子では、むしろ鹿角製の装具をもつことの方が一般的である。また、刀や鉈（図 36-2）などの工具にも鹿角装具を取り付けるものがあるが、きわめて稀少な事例である。

くわえて、刃の短い小刀で鹿角装具を伴うものが多いことにも注目できる（図 36-3）。刀子より大きい、40cm に満たないような大刀は古墳時代のものとしては異例で、広域流通品ではない。在地産鉄器であろう。おそらく、広域流通する直弧文をもつ鹿角装剣の影響を受けて、在地で発展するものと考えられる。

同様に、他に類例が少なく島内に特徴的な出土品として骨鍬があるが（図 36-4）、これは鹿の足の骨を利用して製作しており、島内の人びとが積極的に鹿を利用していたことがうかがえる。

他に剣などにも在地生産したものが含まれ、島内地下式横穴墓群では近畿中央政権から配布されるような斉一性をもった広域流通による武器・武具とともに、在地産鉄器が副葬品の一角を担っ

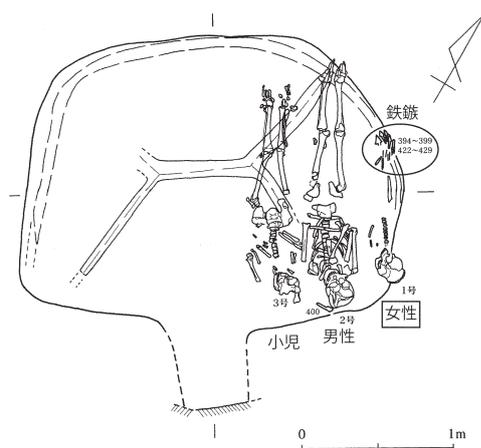


図 34 女性に伴う鉄鍬 (39号)



図 35 圭頭鍬 (左) と長頸鍬 (右) (21号)



1. 刀子（上から14号・22号・20号・17号・117号）
2. ヤリガンナ（81号） 3. 小刀（115号） 4. 骨鎌（55号）

図36 鹿角装の各種副葬品

ていることが理解できる。

少ない装身具 鉄製武器・武具の多さと関連するのであろうが、島内地下式横穴墓群では腕輪以外の装身具の出土が非常に少ない。玉や耳環の出土例がいくつか確認できるが、いずれも古墳時代後期の例で、島内の群中では新しい時期のものである。古墳時代中期、5世紀代の玉がまったくみられないことはむしろ特徴である。

一方で、腕輪では南海産の大型巻貝製の貝釦が数多く確認されている。貝種ではイモガイ出土の地下式横穴墓が11基と多く、ゴホウラ、オオツタノハの出土は1基ずつである。オオツタノハは種子島以南、イモガイとゴホウラは奄美諸島以南が採取地と考えられるもので、南島域との交流を示すものである。おそらくは南島につながる海路交流を行っていた宮崎平野の人びとを介して入手したものと考えられる。

貝釦は広域に流通し、古墳社会の中でも見られるが一般的な装身具とは言い難い。玉の存在しないことも含めて、島内の人びとの出で立ちは古墳社会の中で、個性的であっただろう。

工具は少しあるが農具はない 島内地下式横穴墓群では農具の副葬をみないこともまた特徴である。耕具の刃先や鎌などが、ここでは出土していない。また鉄斧も島内では3例しか出土していない。

品目が武器と刀子に著しく偏り、とくに農工具の出土例が少ないのは、鹿角製品が多いこともあわせて参照すると、生業において山での狩猟採集などの比重が高く、本格的な古墳社会と比べると相対的に農耕への依存度が低かった可能性を想定しておきたい。

3. 武器・武具にみる島内の人びとの活動

次に副葬品のうち広域交流に関わるものを中心に、島内の人びとの活動についてみよう。

島内で目立つ副葬品の一つに刃部に屈曲をもつ蛇行剣（図37-1）がある。10本もの出土があり、

この形式の剣としては最大の集中地である。蛇行剣は九州南部に集中して分布することが知られているが、同時に近畿や東日本でも出土している。すなわち、近畿中央部で製作されたものが全国に配布される中でより九州南部の人たちに集中的に与えられたものとみるのが妥当であろう。

鉄鏃では上記した長頸鏃の他に、二段腸抉柳葉鏃（図 37-2）、短茎重抉腸抉鏃（図 37-3）なども近畿中央部からもたらされた可能性が高い。

そして、この地下式横穴墓群を最も代表する副葬品は甲冑（図 38）である。現在、島内で知られる甲冑出土墓は 8 基である。一墓域の出土としては全国的にみても傑出して多く、他に類例をみない。上記したように近畿中央政権からの配布品であり、その政治的な繋がりを表す資料である。

これらの資料からみると島内の人びとは、決して孤立的な独自の社会を形成していたのではなく、近畿中央政権を中心とする古墳社会の中で、きわめて活発な活動・交流を行っていたことが読み取れる。

時代は倭の五王からその後に継体大王による新たな王統が生まれる時期、近畿中央政権には各地



1. 蛇行剣 (56号) 2. 二段腸抉柳葉鏃 (62号・82号・35号)
3. 短茎重抉腸抉鏃 (56号・39号・114号)

図 37 蛇行剣と鉄鏃



図 38 甲冑

の出身者が上番し、直接的な主従関係を結ぶ時代。また朝鮮半島では高句麗と百済の戦闘が激しさを増し、百済王権が一時崩壊し、その立て直しに倭が関与する時代、それとともに加耶・新羅も活発な政治活動、軍事的な抗争がつづく時代である。

この社会情勢の中で島内の人びとは、近畿中央政権と直接的な関係を結び、また朝鮮半島での倭人の軍事行動にも関わるようなことがあったのではないかと考えられる。島内の人びとは直接、河内・大和や北部九州、朝鮮半島にも渡り、政治・軍事的な活動を担っていたのであろう。この時代の情報は宮崎平野や肝属平野地域にも常時入ってきていたことは、古墳分布と副葬品などからみても間違いない。九州東岸を行き交う広域交流のネットワークに島内の人びとも連なり、積極的に自らも海を渡り、また行き交ったのである。政権との近い関係を示す武器・武具の出土は、島内の人びとの実際の行動を反映するものである。

また、九州南部で同様の性格がうかがえるものに、六野原古墳群を中心とする国富町周辺の地下式横穴墓、鹿屋市祓川地下式横穴墓などがある。

なお、宮崎平野の下北方5号地下式横穴墓や西都原4号地下式横穴墓でも、甲冑など中央政権との関わりをもつ武器・武具が出土しているが、これらは同時代の九州の最高位首長墳の副葬品内容をもち、島内などよりもさらに上位の地下式横穴墓である。地下式横穴墓も皆同じ性格のものとして一括りにはできない。

4. 九州南部における島内地下式横穴墓の性格

島内の中期後葉の鉄製甲冑は、その保有自体が非常に稀少なものではある。しかし、その出土資料をみると、冑と甲しか出土していないことが、その性格を知る上で注目できる。古墳時代には他に頸甲・肩甲がセットとして伴うことが多いし、有力首長墳では甲冑を複数セットもつこともある。なかには、金銅板で装飾する金銅装の甲冑もある。島内では甲冑の中でも上位の組合せ



1～4. SK02 5～6. 115号

図39 馬具

や特殊品がまったく出土しておらず、1点ずつの積み重ねで数が多いのである。甲冑保有者もこの墓群の中で特別な存在ではないし、また甲冑が社会的地位や権威の象徴というよりも実際の政治・軍事に関わった功績に対する下賜品といった側面が強いように思われる。

また、島内では中期後半以降に普及する装飾馬具がまったくみられない(図39)。一方で、中期末の馬埋葬土坑(SK02)が検出されており、鉄製の楕円鏡板付轡・剣菱形杏葉などが出土している。そのほか、2号墓や115号墓でも装飾性に乏しい鉄製内湾楕円形鏡板付轡が出土しており、馬の飼育、乗馬のはじまっていたことは明らかである。にもかかわらず、古墳時代後期には一般的な古墳副葬品となる装飾馬具のみられないことは、馬の生産や労働での利用はあっても、首長層に浸透した権威を象徴する乗馬の風習は行われなかったとみられる。

また鉄鍬は多くても40本を超えず、有力首長墳でみられるような多量の集積はみられない。刀剣も同様で、個人所有の範囲を超えたような多量副葬はみられない。あくまでも個人の活動に伴う入手物で、首長としての権力・地位や富の蓄積の結果とはみられない。

副葬品内容以外に、島内の地下式横穴墓は複数人埋葬を基本とする世帯墓の様相を呈し、非首長墓であり続けることとも重要である。他の古墳築造社会と異なって、ここではさまざまな政治・経済活動を経た後も、集団内の階層分化が進展せず集団を統治・支配する特定の有力首長を排出しなかったものと考えられる。

すなわち、島内の特質は、古墳時代中期後半から後期にかけて、在地から飛び出して、中央政権や外的世界との直接的な交渉の中で、時代を代表するような武器・武具を入手したが、一方でこの墓群の被葬者は、それを契機として特定個人が集団の中で権力を集中させるような社会の複雑化には向かわなかったことが挙げられる。古墳時代社会の中では稀な社会構造である。

古墳時代中期まで、あるいは後期前葉まではそのような個性的な地域社会であっても近畿中央政権も積極的に関係を取り結ぼうとした、地域の多様性は許容される時代であった。このような多様性はその後の古墳時代後期、とくにその後半頃から、政権との内的関係と外的関係、同質と異質なものへの区分へと転換し、国家的な政治領域の境界形成へ向かうことになる。

島内地下式横穴墓はまさに古墳時代という国家形成段階において、各地域の多彩な文化が同質化に向かうなかにあって、自らの主体的な活動によって鮮明な個性を發揮し、評価を得た人びとの墓域といえるだろう。

引用・参考文献

- 清家 章 2004「弥生・古墳時代の女性と戦争」『女性史学』14 女性史総合研究会 pp.1-12
- 津曲大祐(石村友規との共著の一部) 2011「日向・大隅に於ける古墳埋葬施設の多様性」『九州島における古墳埋葬施設の多様性—地域性と階層性はどう理解できるか—』第14回九州前方後円墳研究会実行委員会 pp.228-249
- 橋本達也 2003「副葬鉄器からみる古墳時代の南九州」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会大会事務局 pp.197-218
- 橋本達也 2008「古墳時代墓制としての地下式横穴墓」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館 pp.205-214
- 北郷泰道 1994「武装した女性たち—古墳時代の軍事編成についての覚書—」『考古学研究』40-4 pp.133-141
- 吉村和昭 2012「地下式横穴における埋葬原理と女性への武器副葬」『南九州とヤマト王権—日向・大隅の古墳—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録58 pp.147-155

2. 島内地下式横穴墓群の被葬者と副葬品との関係

表2 島内地下式横穴墓群の被葬者と副葬品との関係

墓No.	人数	人骨情報	武器	刀剣	鏃	工具	貝釧	装身具
1			小鋌衝・横鋌短	刀1	鏃			
A			三鋌短(・金銅装眉 庇付青?・轡)	刀剣				
2	3		内楯円轡・辻6	劍3	長20?	刀子1		
3			三鋌短・草摺?		鏃6	刀子1・ヤ1・斧1		
4				劍1	鏃18	刀子2		
5							3	
B	1							
6								
7				刀1	鏃8		4	
8				劍1	鏃11			
9				劍1・小刀2	鏃7			
10	2~3		胡籜	劍1	圭1・長13	刀子2・ヤ1		
11				劍1	鏃8			
12					鏃2			
13	2	1号男 2号			圭1	刀子1		
14	3					刀子各1(計3)		
15	2	1号女 壮 2号男 熟				刀子1		小玉61 耳環2
16	2	1号女 熟~老 2号男 熟			圭3 長5			
17	1	女 壮				刀子1		
18	1							
19	2	1号 壮~熟 2号 若		劍1	圭1			
20	5	2号女 若 3号男 若 4号男 若 5号女 壮			圭2・骨19	刀子1 刀子1		
21	3	1号男 壮~熟 3号男 壮 2号女 壮	横鋌衝・横鋌短	蛇劍1・鈍1 蛇劍1 蛇劍1	圭2 長16・圭2	斧1・刀子2・ヤ1 刀子1 刀子1		
22	4	4号 1号男 熟 2号 若 3号男 熟		劍1	圭7	刀子1 刀子1		
23	3	3号 2号 幼 1号男 壮			圭3	刀子1 刀子2	イモ1	
24	3	3号 2号女 熟 1号男 壮		刀1・劍1 蛇劍1	長38・骨43 圭1・三角2・骨2 骨22	ヤ1・刀子1		
25	3	1号男 壮 2号 幼 3号女 若		刀1	腸柳1	円錐形1		
26	4	1号 壮 2号女 壮~熟 3号男 壮 4号 小			圭2		イモ10	
27	2?	1号男 壮 ?			長1	刀子1・刀子1		
28	2	1号女 熟 2号男 壮		短劍1		刀子2		
29	4	1号女 壮 2号 幼 3号男 熟 4号 幼			長4・腸三角2	刀子1		
30	1	女 壮			1	刀子1		
31	7	5号男 壮~熟 4号女 熟 3号 小 7号 成人 6号 小 1号女 壮				刀子1 刀子1 刀子1		

		2号男 若~壮		短刀 1	圭 5・三角 1・腸三角 2			
32	1	男 壮		蛇劍 1	長 17・骨 1	刀子 1		
33	2	1号 壮				刀子 1		
		2号 若				刀子 1		
34	2	2号男 壮			圭 1・三角 1・腸三角 3	刀子 1		
		1号 小				刀子 1		
35	4	1号女 熟			柳 1・腸三角 3			イモ 8
		2号 壮						
		4号男? 壮						
		3号 幼		劍 1	柳 3			
36	4	1号 若		劍 1	圭 2			
		2号 壮~熟						
		3号 壮						
		4号 壮			柳 1・圭 1			
37		女 壮						
38	4	1号女 老						
		2号女 壮						
		3号男 熟						
		4号 小						
39	3	1号女 壮			柳 1・圭 3・長 1・無茎重扶 1・骨 4~8			
		2号男 壮				刀子 1		
		3号 小						
40	2	2号 壮						
		1号 壮~熟				刀子 1		
41	5	1号 若~壮						
		2号男 壮		劍 1	長 11			
		3号女 壮						
		4号 壮						
		5号男 壮						
42	3	1号女 若						
		2号 小		小刀 1	長 2・三角 2・片刃 3	刀子 1・刀子 3・鑷子 1		
		3号			長 3・腸三角 4	刀子 1		
43	1							耳環
44	1	男 壮		小刀 1	腸三角 3・方頭 2・片刃 2			
45	1	女 壮				刀子 1		
46	3	1号 若		小刀 1	三角 2・方頭 2			
		3号女 壮				刀子 1		
		2号 成人				刀子 1		
47	3	1号男 壮			圭 2・腸三角 1			
		2号 成人			腸柳 1・長 1			
		3号						
48	1	成人						
49	2	1号		短劍 1	圭 2			
		2号						
50	6	1号						
		2号 壮			長 1・腸柳 1			
		3号女 熟			圭 2・長 2			
		3号女一		短劍 1		ヤ 1		
		4号 熟						
		5号 小		短劍 1	圭 1	刀子 1		
		6号 壮						
51	3	1号男 熟		短劍 1	圭 2			
		2号男 壮						
		3号 若			圭 7			
52	3	1号女 壮						
		2号女 若			骨 3			
		3号女 壮						
53	2	1号 熟?						
		2号 熟?						
54	2	1号 壮						
		2号 壮~熟						
55	5	1号男 熟		刀 1	腸柳 1			
		1号男			長 18・二段腸柳 1			
		5号 若~成人						
		2号 壮~熟		蛇劍 1	腸三角 1・骨 12			
		3号女 熟						
		4号 若		刀 1				
56	6	1号 幼			圭 3・長 20	ヤ 1		イモ 9
		2号 壮		劍 2	圭 2			

鹿角装は太字

ヤはヤリガンナ

		6号 壮		劍1・短劍1	長14・骨4			
		5号男 壮		劍1	圭1・無茎重扶1			
		4号 若~成人						
		3号 若						
57	1	男 壮			長1	刀子1		
58	2	1号女 若			柳1・腸柳2・圭2			
		2号男 熟		鉾1				
59		女 壮~熟						
60	2	2号 幼				刀子1		
		1号 若				刀子1		耳環2
61	3	1号男 壮~熟			圭5・腸三角1			
		2号女 壮						
		3号男? 壮~熟			圭4			
62	3	1号男 壮	横鉾短	蛇劍1	圭3・長20			
		2号男 壮~熟			長3			
		3号女 壮~熟						
63	7	1号女 壮						
		2号男 壮			圭2			
		3号男 壮						
		4号女 熟		刀1	骨27	刀子1		
		7号女 若		劍1	圭1・長13~15	ヤ1		
		6号女 壮			長1			
		5号 小?			長1・骨6	刀子1		
64	3	1号						
		2号男 熟						
		3号女 壮~熟						
65	5	1号		劍1	骨6	刀子1		
		2号		ヤリ身鉾1		刀子1		
		4号		劍1	腸三角1・長三角2・圭2・長頸腸三角2・長頸圭15・長頸片刃15	刀子1		
		5号				刀子1		
66	2	1号				刀子片?		
		2号						
67	2	1号				刀子1		
		2号		刀1				
68		男		劍1	圭1			
69	2	1号男		劍1	腸三角2			
		2号女						
70	3	女 熟~老						
		幼			長4	刀子1		
		小				刀子1		
71								
72								
73								
74								
75								
76	1+		三革衝・横鉾短	刀1	圭3・長11+	刀子1		
77	4	1号男 壮	胡籜	刀1	圭2・長13+	刀子1		
		2号男 壮						
		3号女 壮			長1・不明1			
		4号女 熟		劍1	腸三角1			
78								
79								
80								
81		男 壮	横鉾短	刀1	圭2・長三角1・長30	ヤ1・刀子1		
82	2	2号						
		1号 成人		劍1・短劍1	圭3・長3~4・柳1・二段腸柳1	ヤ1・大型ヤ1・鑷子1		
83	3	1号男 壮		刀1・短劍1	圭1・腸柳2	刀子1		
		2号 壮		劍1	圭1・長3	刀子1		
		3号男 壮		劍1	圭1・長2			
84	1							
85	3	1号女 壮						
		2号男? 壮						
		3号 幼		劍1	圭2・短茎重扶2			
86								
87	2	1号男 熟			長三角12・長4	刀子2・刀子1・鹿角装具		
		2号 小			骨1			

88	5	5号男 壮			圭3・長13	刀子2		
		4号 若						
		1号女 熟						
89	3	2号女? 熟	劍1		圭1・三角1・長1	刀子1・ヤ1・砥石1		
		3号 壮						
		1号男 熟	劍1		長1	刀子1	ゴホ1	
90	4	2号女 壮	短劍1					
		3号男 熟			腸三角1・不明1	刀子1		
		1号 壮~熟				刀子1		
91	4	2号女 成人				刀子1		
		3号女 成人						
		4号 小児						
		1号 熟						イモ4
92		2号 幼			長12			
		3号男? 熟						
		4号男 壮	刀2・鉾1・ヤリ1		圭1・長2	斧1・ヤ1		
93								
94	1	壮						
95	3	1号 成人			圭3	刀子1・鹿角装具片		
		2号			圭2・短頭三角14	刀子1		
		3号 壮						
96	7	1号 若以上				刀子1・鹿角柄部		
		2号-3号 熟	蛇劍1・劍1		圭5・腸柳1			
		4号 壮				刀子1・ヤ1		
		5号				刀子1		
		6号 若						
		7号 壮						
		97	3	1号 壮			圭2	
2号男 壮								
3号女 熟					圭2			
98	1				刀子1			
99	2	1号女 壮~熟						
		2号男 壮						
100	3	1号	小刀1					
		2号	劍1		圭2・三角1・腸柳3・方頭3	刀子1		
		3号			鎌?	刀子1		
101	3	1号 熟					ツタ1	
		2号男 熟					ツタ1	
		3号男 壮	劍1		圭2・無茎腸三角1			
102	2	1号 壮			圭3			
		2号						
103	3	1号女 老					イモ6	
		2号男 熟	短劍1					
		3号女 壮						
104	5	1号男 壮	刀1		圭2			
		2号			圭2			
		3号 幼						
		4号女 熟						
		5号 幼						
105	5	1号 幼						
		2号 壮						
		3号男 熟						
		4号男 壮	劍1		圭1・腸長三角1			
106	4	1号 幼						
		2号女 熟						
		3号女 老						
		4号女 壮						
107	3	1号女 熟				刀子1		
		2号女 熟						
		3号?						
108		女 熟						
109		男 熟					イモ5	
110	4	1号 小	短劍1		圭2	刀子1		
		2号男 若						
		3号女 壮			圭1・腸長三角1			
		4号男 熟			圭1・長2・長三角2	刀子1		小玉
111								

112	4	1号男 熟?						
		2号		小刀 1	片刃 11			
		3号 小?						
		4号		刀 1	方頭 2・長 8・腸長三角 1・不明 1	刀子 1		
113	5	1号男 壯		刀 1	長 1	鑷子 1・錐狀 1		
		2号 小			長 2			
		3号女 老			圭 1・長 11・長三角 1・短頸腸長三角 1・骨 2			
		4号 幼				刀子 1		
		5号男 壯			長 1・骨 1			
114	5	1号男 熟		刀(象嵌)1・小刀 1	長 26	ヤ 1		
		2号 小				刀子 1		
		3号 熟		劍 1	圭 2・長圭 2・無茎腸 1	刀子 1		
		4号 小						
		5号女 壯				刀子 1		切小玉 2
115	5	1号女 壯				刀子 1		イモ 2
		2号 小						
		3号男 熟	小鋌衝・楯円鏡板・辻 3・鉸具	刀 1・小刀 1	長圭 6・長 1			
		4号 若			長 1			錫耳環 2
		5号女 熟		小刀 1		刀子 1		
116	2	男成人・成人	両頭金具	小刀 1	方頭 3・圭 5・長 2・長三角 6	刀子 2		
117	4	4号 小				刀子 1		
		3号男 壯		蛇劍 1		刀子 1		耳環 2
		1号 小			長 1	刀子 1		
		2号 小			圭 1・長 4	刀子 1		
118	3	1号女 熟				イモ 3		
		2号 壯		小刀		刀子 1		
		3号 若				刀子 1		
119	4	1号女 壯		刀	腸長三角 13	鑷子 1		
		2号 小			圭 1・腸長三角 3	刀子 1		
		3a号 小						
		3b号 小			圭 1・長三角 1	刀子 1		
120	2	1号女 熟				刀子 1		イモ 2
		2号 小				刀子 1		
121		小?			圭 2・方頭 1	刀子 1		
122	3	2号 小						朱玉
		3号女 壯						
		1号男 壯			腸長三角 1・骨 9	刀子 1		
123	4	4号 小			長長三角 1	刀子 1		
		3号 未成年			長長三角 3・骨 19?			
		1号男 熟		刀				
		2号女 熟						錫耳環 2
124	2	1号男 壯			圭 1・長三角 7・骨 13~14	刀子 2・鹿角刀子柄		
		2号男 壯			圭 1・長三角 3・腸長三角 1・長 10・骨 1	刀子 1		
125	2	1号 壯				刀子 1		
		2号男 壯	両頭金具		腸三角 2・長三角 4	刀子 1		
126	3	1号男 成人		劍 1	方頭 1・腸長三角 4・長三角 3・不明 2			
		2号男 壯		小刀 1	腸長三角 2・片刃 3			
		3号女 成人				刀子 1		
127	2	1号男 壯			圭 2・長圭 4・長 30	刀子 1		
		2号女 壯						
128	2	1号男 熟						
		2号女 熟						
129	5	1号 壯						
		2号女 壯						
		3号男 壯					刀子 1	
		4号男 壯				圭 2・長三角 1		
		5号 幼						
130	4	1号女 壯						
		2号 若						
		3号男 成人					刀子 1	
		4号 成人?						
SK02			楯円鏡板・鉄劍菱・環状雲珠・革金具・鉸具・辻					
SK03			環状鏡板付轡					
SI03			小刀片	長 24	刀子 6片・ヤ片			

鹿角装は太字

ヤはヤリガンナ

V. 九州南部古墳時代の甲冑資料

1. 島内地下式横穴墓群の甲冑

遺跡概要 えびの市大字島内に所在する島内地下式横穴墓群は、すでに発掘調査事例が 140 基を超え、全体では 1000 基に達するのではないかとみられる大規模地下式横穴墓群である。その内部にはかつて 12 基ほどの円墳があったというが、現状で古墳は 1 基残るのみである。また鉄製品を中心とする副葬品も豊富で、その遺存状況が良好であることも特筆される。ここでは甲冑出土墓およびその甲冑についてみておく。いずれも特別な大型首長墓などではなく、また複数人物を同一施設内に埋葬することを特徴とする。

1号墓 出土資料は東京国立博物館所蔵の杉ノ原出土ともされるものである。1905年に石槨から出土したと記録されているが、「羨道」、「玄室」といった記録もあり、古墳にともなう地下式横穴墓のようでもある。小札鋌留衝角付冑、横剗板鋌留短甲、大刀、鎌が出土している。

冑は小札鋌留式で、衝角底板は外接式とする。地板第1段小札枚数は左が不明、右が21枚であろう。後頭部中央に大きい小札をおく。また第2段は左右ともに23枚である。なお、村井崑雄は第1段右を20枚としているが、遺存状態が悪い部分を補修しており現状では確認できない。内面小札形状は角を落として長六角計を呈するものが多く、また未使用孔は少ない。中期甲冑第V段階（図40、以下中期甲冑段階はこの図による）のものともみてよい。なお、三尾鉄は付属しないが、伏板内面の三尾鉄付孔には明瞭に綴じ紐が残る。外面の三尾鉄付孔の後側には有機質の付着痕跡が認められる。

短甲は、鋌が著しく少なく、帯金がきわめて太い。内面の板形状は隅丸の粗雑な調整によるものである。滝沢分類のIIc式で（滝沢1991、以下鋌留短甲の分類はこれを用いる）、帯金式短甲としても

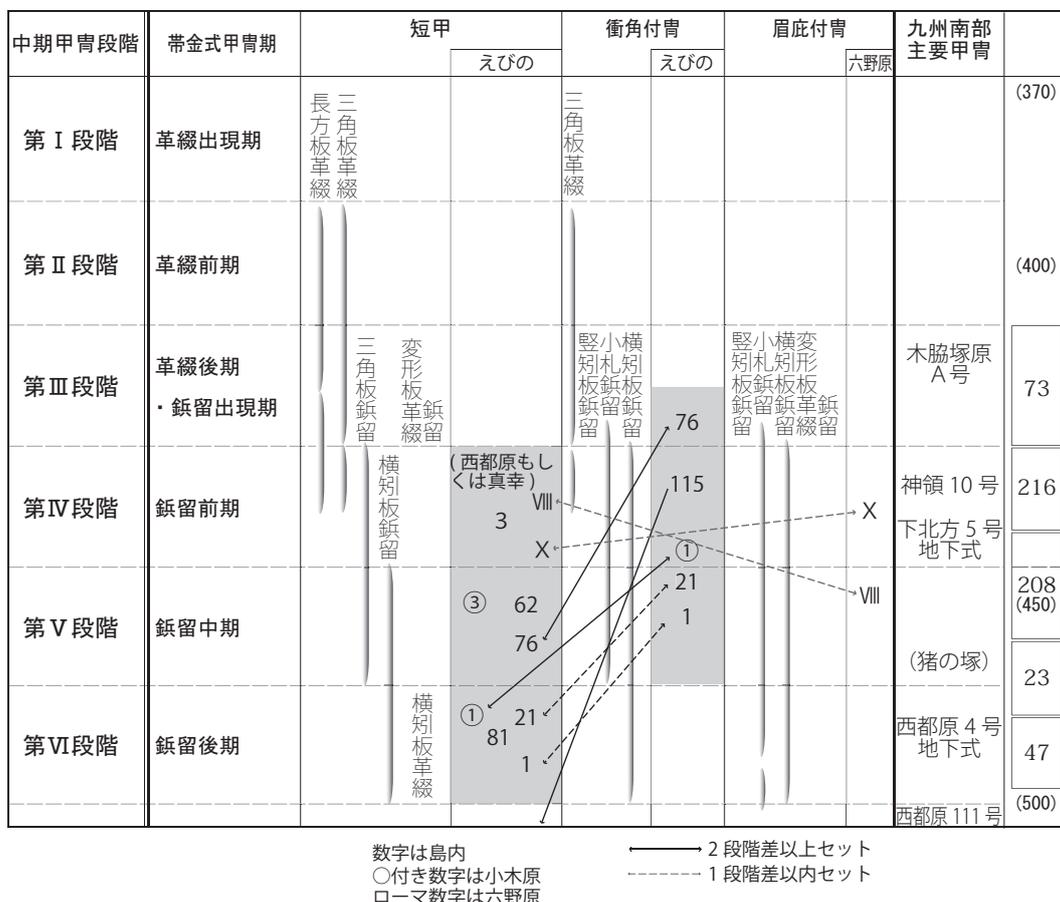


図40 えびのを中心にみた九州南部の甲冑型式の位置

表3 えびの市島内地下式横穴墓群・小木原地下式横穴墓群出土短甲の主要属性

名称		地板	後胴3段 銚数	後胴3段 幅 (cm)	前胴3段銚 数(上下計)	右前胴5段 銚数	銚頭径 (mm)	覆輪	蝶番
島内	1号	横矧板	5	6.2	2	3	7-8	鉄包	不明
	3号	三角板	11	3.5	2	7	6-7	革組	胴一連
	21号	横矧板	7	4.3	1	4	8.5-10	鉄折	長方形2銚
	62号	横矧板	9	4.15	4	6	6.5-7	鉄包	長方形2銚
	76号	横矧板	8	3.9	4	5	7	革組	三角形3銚
	81号	横矧板	5	3.7	2	3	9-9.5	前・鉄折 後・鉄包	方形3銚
	西都原もし しくは真幸	三角板	12	3.5	6	7	3.5-4.5	革組	不明
小木原	1号	横矧板	6	4.55	3	4?	9.5	革包+鉄包	方形4銚
	3号	横矧板	9	4.0	4	5	7	鉄包	長方形2銚

最終段階の中期第VI段階に位置づけられるものである。後胴・前胴とも内面に先端の丸い工具を打ち込んだとみられる半球形の小さな凹みが軸線状やカーブのはじまる付近などにみることができる。加工の際の割り付けに伴うものではないかと考えている。

甲冑のセットは、大きな時間差ではないが短甲よりも冑が1段階古相に位置づけられる。

3号墓 昭和41年に発見、調査されており、玄室は平入りで寄せ棟天井とし、平面形は楕円形とするものである。三角板銚留短甲、圭頭鎌・長頸鎌計6、革製草摺?、斧、鉈、刀子各1が出土した。

短甲は三角板銚留(図41～43)で、前胴を横矧板とすることが特徴である。胴一連で比較的小さい銚を多く打ち、また帯金も細く、銚留短甲の中でも古相のスタイルをとる。II a式であり、中期甲冑第4段階に位置づけられるものであろう。後胴中軸ライン上の上段地板と中段地板中央、両脇部下段帯金の合わせ目の前後両側、両前胴下段地板前端付近の計8箇所になにも留めていない銚を打っている。また、後胴中軸ライン上下段帯金・下段地板中央および後胴上段帯金左右端近くの計4箇所には穿孔しながらも、再び鉄で埋めた孔がある。銚頭を欠いた銚脚で埋めたとみられるが、なら機能はもたない。装飾でもないので、製作工程における割り付けなどに由来するものではなかろうか。

21号墓 21号墓から115号墓は、平成以降、えびの市教育委員会の発掘調査によるものである。21号墓は平入り寄せ棟天井の長方形玄室で、長さ1.8m、幅2.0-2.18m、高さ推定0.84mである。被葬者は3体で、甲冑は初葬の壮年～熟年の男性に伴っている。横矧板銚留衝角付冑、横矧板銚留短甲、蛇行剣1、鉄鉾1、斧1、鉈1、刀子1、圭頭鎌2がセットで、同墓ではさらに3号人骨(男性)に蛇行剣1、刀子1、長頸鎌16がセット、2号人骨(女性)に蛇行剣1、刀子1がセットで出土する。

衝角付冑(図52・53)は横矧板銚留式で、上接式の範疇に含まれるが、腰巻板の綴じ代を下側に張り出して、銚留する上下接式(川畑2011)になる。銚は小さく密である。後頭部には接ぎ目がなく地板は1枚でつくる。中期甲冑第IVないし第V段階である。後頭部中央付近の地板第1段・第2段、胴巻板、腰巻板いずれも穿孔がある。また左右前端近くの地板第1段・第2段、胴巻板のいずれにも衝角部のカーブに平行して並ぶ穿孔があるが、とくに機能は確認できない。また、地板第2段の下側は内面で見るとほとんどが銚留の穿孔を開け直している。銚は当初の孔よりやや下、後頭部を基準にして左右とも前側に向かってずらして留めている。

短甲(図44・45)は横矧板銚留、右前胴開閉式で、前胴を6段構成とすることが特徴である。覆輪は鉄折返覆輪である。右前胴開閉で蝶番板の上部には覆輪を施すが、下部にはない。また、大銚を数少なく打つ。滝沢分類ではII b式になろうが、前胴6段の横矧板銚留短甲は最新の中期甲冑第VI段階に位置づけられるものである。押付け板内面左右両肩部に花卉状打痕(古谷2012)がある。また、前胴中段地板内面の脇へ向けてカーブをはじめるあたりにもある。下段帯金の接ぎ目が左脇部にはなく、左前胴部で小鉄板状の帯金を配して接いでいる。

短甲は帯金式甲冑の中でも、最新段階に位置づけられるが、冑はそれよりも前段階の型式に位置づけられ、セットとしてはやや時間差を含んでいる。

62号墓 平入り寄せ棟天井、隅丸台形の玄室で、長さ1.68m、最大幅2.3mである。被葬者は3体で、甲冑は1号人骨・壮年男性にとまう。横矧板銚留短甲と蛇行剣1、圭頭鎌3がセットとなる。2号人

表4 島内地下式横穴墓群出土衝角付冑の主要属性

名称	地板	結合	衝角部	地板 第1段幅	胴巻板 幅	地板 第2段幅	腰巻板 幅	鉦頭径	鉦	鉦幅
島内1号地下式	小札	鉦留	外接式 衝角底板 E 衝角先端 A	3.4	3.3	3.3	3.3	3-4		
島内21号地下式	横矧板	鉦留	上下接式 衝角底板 A 衝角先端 Ba	2.2	3.6	2.8	3.2	4	3段 革包覆輪 後頭部抉り	1段:3.9 2段:4.0 3段:4.2
島内76号地下式	三角板	革綴	上接2式 衝角底板 A 衝角先端 Bb	5.5	2.2	4.75	2.3	3.5-4	1段 覆輪なし、 折返し	1段:8.8-9.7
島内115号地下式	小札	鉦留	上下接式 衝角底板 A 衝角先端 Bb	2.7	3.4	2.7	4.0	—	4段 革包覆輪 後頭部抉り	1段:3.3 2段:3.5 3段:3.5 4段:3.5

板幅単位は cm、鉦頭径単位は mm
衝角部分類は川畑 2011

骨（男性）には長頸鏃3本、3号人骨（女性）には副葬品がないとされる。

短甲（図46・47）は横矧板鉦留、右前胴開閉式で、鉄包覆輪とする。Ⅱb式に位置づけられ、中期甲冑第Ⅴ段階である。左前胴縦上板は上段地板下端部横付近にも接ぎ目のあることが特異である。後胴押付板左右肩部付近にそれぞれ花卉状打痕がみられる。

76号墓 玄室は歪んだ台形を呈し、天井は残っていない。長さは1.6-1.7m、幅1.7-2.2mである。被葬者は1体以上で人骨は残らない。三角板革綴衝角付冑、横矧板鉦留短甲、圭頭鏃3、長頸鏃18以上、刀子1がセットとなる。また玄室内では三角板革綴衝角付冑と大刀が別群に分けられて置かれていた。

衝角付冑（図54・55）は三角板革綴式で、衝角底板は上接2式である。地板第1段9枚、第2段11枚構成である。鉦は覆輪をもたない一枚板鉦である。これらの特徴は大阪府百舌鳥大塚山古墳あるいは京都府久津川車塚古墳3号冑と同様であり、中期甲冑第Ⅲ段階に位置づけられる。

短甲（図48・49）は横矧板鉦留、右前胴開閉式で革組覆輪とする。Ⅱb式に位置づけられるもので、中期甲冑第Ⅴ段階である。隅丸三角形3鉦の蝶番金具は珍しい。爪形3鉦の変異形であろう。前胴左右下段帯金の前端近くに穿孔がある。3号地下式例では機能のない鉦を打っている位置に相当する。

冑と短甲は明確に時期差がある。出土位置は玄室内で分かれて置かれており、人骨が不明のためそれぞれ別の被葬者に伴う可能性も考えられなくはない。しかし、通常は冑だけを保有するというものではないので異なる被葬者に伴うとみるのは無理があり、冑が極端に古相の類例の少ない特殊なセット関係として理解しておきたい。ただし、冑のみ出土した特殊事例が、同じ墓群の115号地下式横穴墓に存在するので、別々でセットとならないことを否定まではできない。

81号墓 平入り寄せ棟天井、長方形の玄室で、長さ1.27m、幅2.02-2.14mである。玄室上半部には赤色顔料が塗布される。被葬者は壮年男性1体で、横矧板鉦留短甲に大刀1、圭頭鏃2、長三角形鏃1、長頸鏃30、鉦1が伴う。

短甲（図50・51）は横矧板鉦留、右前胴開閉式で、前胴は鉄折返覆輪、後胴は鉄包覆輪というように前後で覆輪が異なっている。Ⅱc式に位置づけられ、最新段階の中期甲冑Ⅵ段階である。後胴押付板内面右肩付近に花卉状打痕が1箇所確認できる。他はサビのため確認できない。

115号墓 平入り寄せ棟天井、平面形は隅丸台形の玄室である。長さ1.6-1.88m、幅2.2-2.54m、高さ1.13mである。被葬者は5体で、3号熟年男性に、横矧板鉦留衝角付冑、大刀、短刀、圭頭鏃6、鉄製内湾楕円形鏡板付轡、辻金具3、鉸具1が伴うと考えられている。1号壮年女性は刀子1、左腕にイモガイ製貝釧2を伴い、2号人骨は小児で副葬品はなく、4号は若年で長頸鏃1、錫製耳環があり、5号熟年女性は小刀と刀子を伴う。

衝角付冑（図56・57）は小札鉦留式で、衝角底板は上下接式である。地板第1段の小札枚数は左21枚・右20枚、第2段は左23枚・右22枚である。鉦は4段で後頭部に抉りをもつ。これらの特徴は中期甲冑第Ⅳ～第Ⅴ段階に位置づけられるが、むしろ前者で考えておきたい。

鉦第1段の先端は左右ともに小鉄板を鉦留して接いでいる。上方の鉦ほど長く、また前へ緩やかに突き出すようになっており、鉦を連ねると前端側面形は斜め下がり外形となる。短甲を伴わないという特異な出土状況である。

A号墓 1933年鉄塔基礎の建設の際に金銅装?の言い伝えをもつ眉庇付冑・甲・刀剣・轡が出土したという。中野和浩は宮崎県立西都原考古博物館が所蔵する「西都原もしくはえびの市真幸出土」とされる短甲がこれにあたるとした(中野 2001, p. 4)。しかし、その後、この資料に関わる記録を精査した吉村和昭によってそれは否定されている(吉村 2005, p16)。「西都原もしくはえびの市真幸出土」は結局、西都原とも島内とも出土地を決定づけるに至っていないのであるが、いくつか考え得るなかの一つの候補として、1933年に実施された文部省・上田三平調査の調書に記された「3号」墳の可能性が指摘されている。ともかく、A号墓の甲冑については不明とせざるを得ない。

西都原もしくは真幸 上記のように西都原出土の可能性もあるが、「真幸」は島内地下式横穴墓群を指すので、その可能性を考えてここでも記しておく。小鋌を密に打つもので、三枚留を多用しており、I a式に位置づけられる。鋌留短甲としても最古段階に位置づけられ、島内地下式横穴墓群での出土であれば、この墓群中でももっとも古い段階に位置づけられるであろう。

甲冑セットの傾向 島内地下式横穴墓群出土甲冑全体を通してみると、セット関係において、いずれも冑が古く、短甲が新しい様相をもつことに気づかされる。冑しか出土していない115号地下式横穴墓の場合も、明らかに他の遺物相よりも冑が古い。

鋌留技法導入期の甲冑セットを対象とした鈴木一有の検討を援用すると(鈴木 2012, pp. 336-338)、基本は同じ製作段階に属する甲冑がセットとなり、冑の方が新相のものを取り入れる事例も多いが、古相の冑に新相の短甲が組合わさる例は数少ない。島内地下式横穴墓群で多くみられる甲冑セットはかなり特徴的な組合せといえる。帯金式甲冑の共有という点では一定の政治的な評価は確認できるが、最新の甲冑を組合せていない点において、その生産および配布主体である近畿中央政権との間に一定の距離があり、高い地位を認めることはできないだろう。その点は短甲一領だけのものも含めて、冑以外の付属具がないこと、複数領副葬のないことなども関連しているであろう。西都市西都原4号地下式横穴墓、宮崎市下北方5号地下式横穴墓、曾於郡大崎町神領10号墳などとは、社会的な地位に差があり、より下位に位置づけられたことは確かであろう。

細部の特徴—花卉状打痕・半球形打痕・鋌・充填穿孔・穿孔・小鉄板— 近年、微細な技法にかかわる痕跡について整理が進んだが(古谷 2012, pp. 75-78)、そのなかでも花卉状打痕はその機能が不明なものである。現状において、短甲では横矧板鋌留短甲にしか確認されていないことに注目できるが、他にはマロ塚古墳1号眉庇付冑でも確認されている。また、九州に顕著に分布するが、茨城県上野古墳の短甲にも認められるので、これは埋葬施設形態に起因する遺存状態を反映する可能性が高い。島内地下式横穴墓群において、21号・62号・81号墓出土短甲で確認できるのは、良好な遺存状態によるもので、みえないものはサビに覆われている可能性が高い。一方、衝角付冑では確認されていない。施工場所は共通性が高く、製作時の割り付けなどに関わるものとみるのが理解しやすい。

花卉状打痕と同じ場所ではないが、1号墓出土短甲では小さく1点打つだけの半球形打痕がある。3号墓出土短甲では、鉄板を接続しない鋌、穿孔しながらも鉄で埋めている孔(充填穿孔と仮称)がある。鋌は装飾的な意味も兼ねるのであろうが、これらは鉄板の中央や端部付近に多くみられるので、割り付けなどに関わるとみるのが妥当であろう。また、76号墓の短甲、21号墓の衝角付冑では開いたままの穿孔もあり、同様のものの可能性がある。

花卉状打痕・半球形打痕・無接続鋌・充填穿孔・穿孔のうち、前二者は横矧板鋌留短甲に顕著で、後三者は三角板鋌留短甲で認められ、また衝角付冑では良好な資料でも花卉状打痕が確認されないことなど、これらは製作技法上の工人系統に関わる可能性を考えて今後の検討に備えたい。

また、短甲では、1号墓左前胴下段帯金、3号墓左前胴裾板、21号墓左前胴下段帯金・左脇中段地板、62号墓左前縦上板、81号墓左前胴下段帯金に、本来分割すべきところではない分割がみられる。滝沢誠は小鉄板として、技術系統と関連する可能性を指摘しており(滝沢 2008, pp. 18-21)、その分析は必要であるが島内でかなり高頻度に観察できるのは、これらが特殊な技法ではなく、上記の微細痕跡とともに、鉄の遺存状態と関連している可能性は考慮しておく必要がある。

九州南部の良好な遺存状態を保つ資料は、他地域の出土資料では明らかにし難い微細情報を提供し、甲冑の型式学的研究に新しい視点を与え得るものであることはあらためて注目できよう。

2. 島内 3 号地下式横穴墓出土 三角板鋌留短甲



图 41 島内 3 号地下式横穴墓出土短甲



图 42 島内 3 号地下式横穴墓出土短甲 細部 (1)



黒矢印より前は分割・小鉄板
 白矢印は銕、黄矢印は充填穿孔

図 43 島内 3 号地下式横穴墓出土短甲 細部 (2)

3. 島内 21 号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留短甲



图 44 島内 21 号地下式横穴墓出土短甲



图 45 島内 3 号地下式横穴墓出土短甲 細部

矢印は花卉状打痕

4. 島内 62 号地下式横穴墓出土 横矧板鋌留短甲



图 46 島内 62 号地下式横穴墓出土短甲



図 47 島内 62 号地下式横穴墓出土短甲 細部

矢印は花卉状打痕